

面をヨコハケののち波状文とする。中期の土器である。

土壌 192 頸部の屈曲が弱い甕の口縁部(第81図29)を1点図化した。中期の土器であろう。

土壌 197 壺(第81図28)を1点図化した。I縁端面を僅かに垂下させ、外面をタテハケののち頸部に沈線を施文し、口縁内面をヨコハケののち2個1対の瘤状突起を貼付ける。中期の土器である。

土壌 198 壺と甕の2点を図化した。壺(第82図6)は太い頸部から小さく外反した口縁端面にヘラ刻み目を加える。頸部は3本の沈線の間に斜めにヘラを重ね、羽状とする。内面にヨコハケを残す。甕(第82図7)は外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文を施文する。いずれも中期の土器である。

土壌 203 壺の口縁部(第88図5)を1点図化した。口縁に明瞭な端面をつくり、外面をタテハケ、内面に羽状櫛刺突列点文を施文する。中期の土器である。

土壌 204 甕のI縁部(第88図1)を1点図化した。口縁部をヨコハケで幅広として僅かに摘み上げ、以下をタテハケ、内面をヨコハケとする。中期の土器である。

土壌 206 壺1点と甕の口縁部2点の合計3点を図化した。壺(第84図1)は頸部から「ハ」の字状にゆるく開く口縁部で、頸部に櫛描直線文と櫛描波状文を交互に重ねる。甕はI縁部をヨコハケで幅広として斜めに摘み上げ、以下をタテハケ、内面をヨコハケとするもの(第88図2)と、I縁端部に櫛刺突を加えたのち、タテハケとするもの(第88図4)である。いずれも中期の土器である。

土壌 208 甕のI縁部を3点図化した。頸部から「く」の字に屈曲した口縁部(第87図4)で、端部を上下にやや拡張する。口縁部をヨコハケで幅広として摘み上げ、以下をタテハケ、内面をヨコハケとするものは、内面のヨコハケを強くし立上りを明瞭にしたもの(第88図3)と、ヨコハケが強いもの(第87図5)である。中期後葉の土器であろうか。

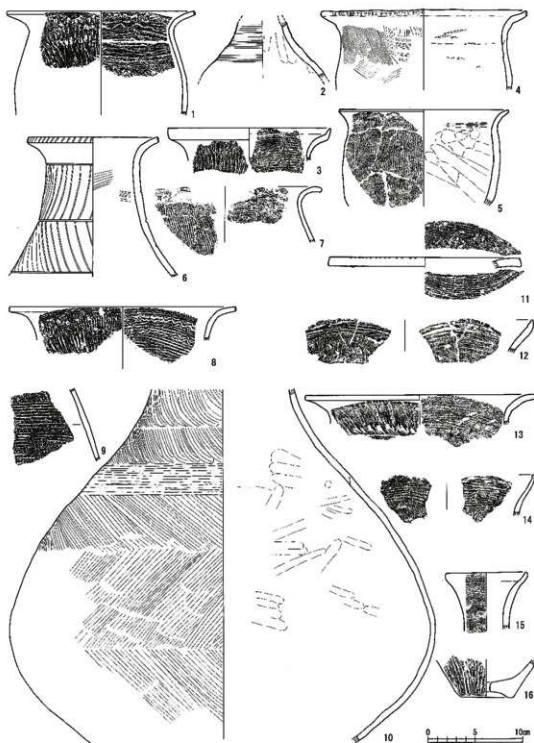
土壌 211 甕の口縁部(第87図1)を1点図化した。口縁部をヨコハケで幅広として摘み上げ、以下をタテハケ、内面をヨコハケとする。中期の土器である。

土壌 212 壺と甕の2点を図化した。壺(第84図3)は口縁部と底部を欠く、胴部のみのものである。外面をタテミガキとする。甕(第84図2)はI縁部から胴部上半のもので、I縁部が小さく立上がり、受口状口縁のものである。摩滅のため胴部が不明である。いずれも中期の土器である。

土壌 224 甕(第85図2)を1点図化した。完形に復元できたもので、口縁部をヨコハケとし、山形口縁とするが、まだ口縁帯は作り出していない。胴部外面をタテハケののち頸部にハケの直線文を3段施文する。内面は口縁部から頸部までをヨコハケ、頸部と底部にユビオサエを残す。中期の土器である。

土壌 225 甕(第84図4)を1点図化した。口縁部にヘラ刺突を加え、外面をタテハケ、内面の口縁部をヨコハケとする。中期の土器である。

土壌 226 高坏(第85図4)を1点図化した。坏部と脚部は接点がないが、色調や胎土から同



第 82 図 土壇出土土器実測図 7 (縮尺 1/4)

一個体と判断した。境状の坏部に口縁帯が張り出すと思われるが、口縁帯は大きくは垂下しないものと考えられる。脚部は端面を幅広にする。本遺跡では非常に珍しい、中期の高坏である。

土壌 233 壺（第84図7）を1点図化した。口縁上端を僅かに摘み上げる。外面をタテハケ、内面をヨコハケとする。中期の上器であろう。

土壌 240 甕の口縁部（第87図6）を1点図化した。外面をタテハケとする。中期の土器である。

土壌 244 壺の胴部片1点と甕の口縁部1点を図化した。壺（第87図3）は刺突列点文に櫛描直線文を重ねるものである。甕の口縁部（第87図2）はヨコハケで幅広として摘み上げ、以下をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文を施文する。中期の土器である。

土壌 246 小型と大型の鉢と考えられる口縁部の2点を図化した。口径から小型と考えられた鉢（第87図7）には小さな脚台が付く可能性がある。外面にタテハケ、内面にユビオサエを残す。やや厚手の器壁から大型の鉢の口縁と考えたもの（第87図8）は口縁部を弱いヨコハケ？ののちタテハケとする。いずれも中期の土器であろう。

土壌 249 壺4点と甕1点の合計5点を図化した。完形に復元された壺（第84図6）は大きな底部から脹らんだ胴部に、頸部で屈曲した短い口縁となる。口縁端部はやや膨らませて面をつくる。内外面ともタテハケを残す。ずんぐりして非常に安定した壺である。壺には口縁部片と胴部片もある。口縁部片（第87図9・10）は胎上・色調などがやや異なるため別個体としたものであるが、口縁端部を押さえて幅広とし、外面をヨコハケとするものである。胴部片（第87図11）は頸部に近い部分で、櫛描直線文に羽状櫛刺突列点文を施文する。甕（第84図5）は頸部の屈曲が弱く、口縁が小さく外反する。口縁端部にはヘラ刻み目を加え、内外面をヨコハケとする。いずれも中期の土器である。

土壌 250 壺と甕の口縁部の2点を図化した。壺（第87図19）は口縁端面の沈線文の下端に刺突列点文を加え、頸部に櫛描直線文を施文する。口縁内面に羽状櫛刺突列点文を施文して、その真ん中に円形浮文を、間隔をあけて貼付ける。甕（第87図18）は口縁端部にヘラ刺突を加え、以下をタテハケののちヨコハケ、内面には櫛描波状文を施文するもので、壺の可能性もある。いずれも中期の土器である。

土壌 256 甕の口縁部3点と壺の胴部片2点の合計5点図化した。大型甕の口縁部（第85図1）はやや立上った口縁帯の一部を盛り上げて、山形口縁とする。外面はタテハケののちヨコハケ



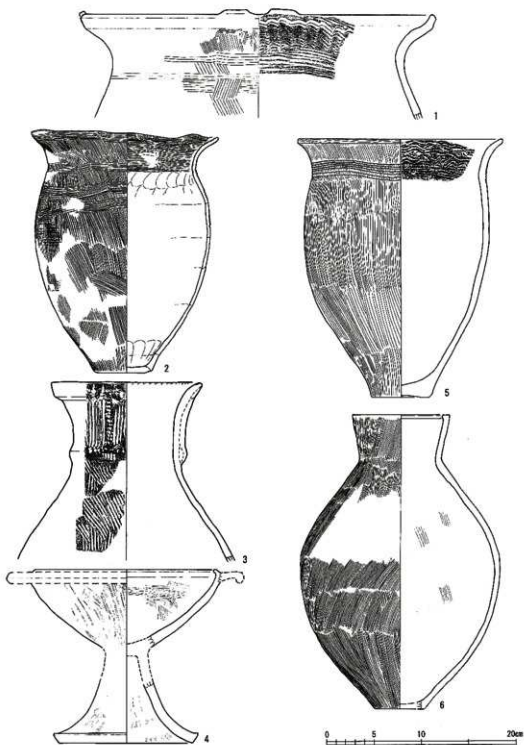
第83図 土壌出土土器実測図8（縮尺1/4）

とし、内面はヨコハケののち波状文を施文する。残る甕の口縁部は、外面をタテハケ、内面をヨコハケとし、口縁端部を強くヨコナデするものを基本とするが、僅かに摘み上げるもの（第87図14）と、内面にさらに波状文を施文するもの（第87図15）とやや異なる。甕の胴部片は沈線で箱重文を施文するもの（第87図13）と、梯描直線文や波状文を施文するが、条痕文の影響のもの（第87図12）である。いずれも中期の土器である。

土壇 257 甕の口縁部を2点図化した。いずれも外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文を施文するものである。しかし器壁の厚さなどから大型の甕と考えたもの（第87図17）は口縁端面にヨコハケののちV字にヘラで刻む。もう1点（第87図16）は口縁端面に波状文を施文し、以下をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文とする。いずれも中期の土器である。



第84図 土壇出土土器実測図9（縮尺1/4）



土壌 258 甕の口縁部(第87図20)を1点図化した。口縁端部にヘラ刻み目を加え、外面をタテハケとする。中期の土器である。

土壌 259 甕の口縁部(第87図21)を1点図化した。やや肥厚した口縁端部にヘラ刻み目を加え、外面をタテハケとする。中期の土器である。

土壌 260 甕の口縁部を2点図化した。いずれも外面をタテハケののち一部ヨコハケ、内面をヨコハケののち波状文を施文するものである。ただし施文具、特に内面についてハケが明らかに太いもの(第87図23)と、細く波状文も細かいもの(第87図24)があって、この2点は別個体である。いずれも中期の土器であろう。

土壌 261 甕の口縁部(第87図22)を1点図化した。口縁内面を三角刺突列点文と、円形刺突列点文に三角刺突列点文の間を櫛櫛波状文で充填する。中期の土器である。

土壌 262 壺の口縁部2点と甕の口縁部1点の合計3点を図化した。袋状口縁部の壺(第87図27)は口縁上端面に刺突列点文、外面に羽状刺突列点文を施文する。広口甕の口縁部(第87図25)は幅広の口縁下端にヘラ刻み目を加え、外面をヨコハケとする。甕(第87図26)は口縁端部をヨコハケののちヘラ刺突を加え、以下をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文を施文する。いずれも中期の土器であろう。

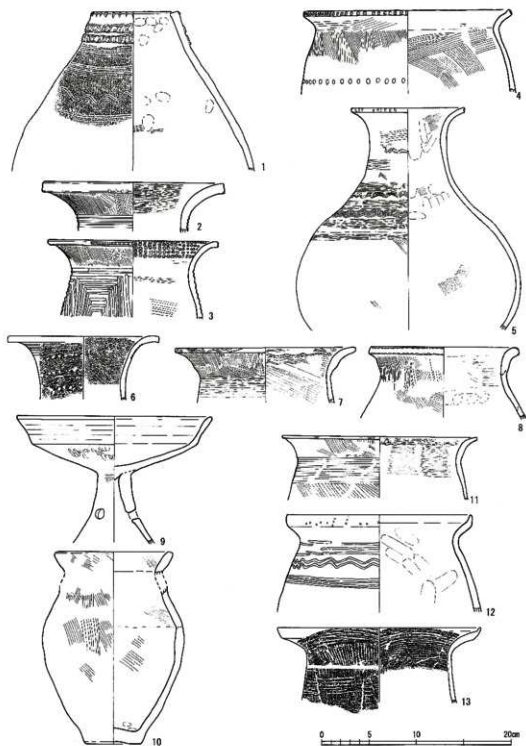
土壌 265 完形の甕1点と甕の口縁部2点の合計3点を図化した。完形に復元された甕(第85図5)は丸い口縁端部をヨコハケとし、外面をタテハケののちに頸部にハケ工具で直線文、内面は口縁部にヨコハケののち波状文を施文する。底部が全体に上げ底である。この甕の一部に溝73から出土した破片が接合している。甕の口縁部は、口縁端部にヘラ刺突を加え、外面をタテハケ、内面に三角刺突列点文を4段施文するもの(第87図30)と、口縁端部を(おそらくヨコハケで幅広とし)摘み上げ、外面をタテハケとするもの(第87図31)の2点である。後者は器壁がやや薄く、頸部も延びるようなので、受口状口縁の壺となるかもしれない。いずれも中期の土器である。

土壌 267 底部の一部を欠くのみ壺(第85図6)を1点図化した。胴部最大径が僅かに下に位置する長胴から、短く直立気味に立上った口縁部の上端面を強く押さえて内側に肥厚させる。内外面ともタテハケとする。中期の土器である。

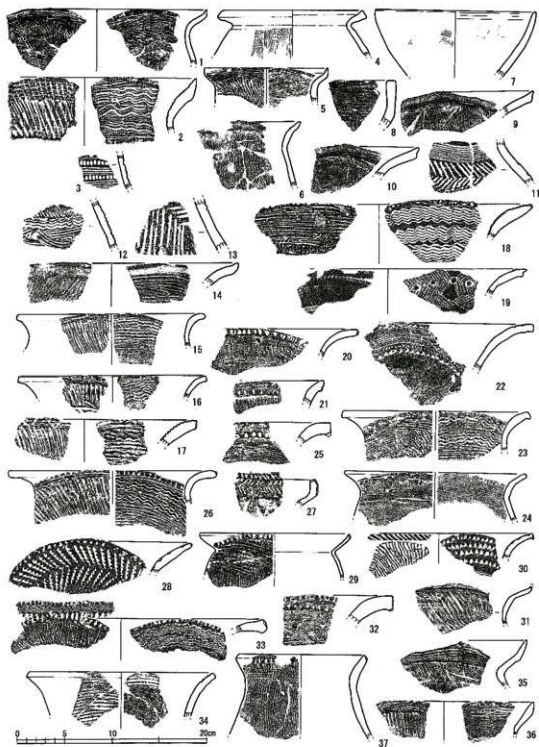
土壌 274 壺の口縁部(第87図28)を1点図化した。口縁端部にヘラ刺突を加え、内面はこの刺突に合わせるように羽状刺突列点文を施文する。中期の土器である。

土壌 275 口縁部から胴部上半の壺(第85図3)を1点図化した。頸部から口縁部への屈曲が明瞭でなく、口縁も大きく開かないが、端部外面と頸部に口縁帯を貼付けて凸帯とし、さらにその2本の凸帯を縦の凸帯でつなげる。その口縁帯と口縁内面に刻み目を加え、凸帯の間と下を太いハケでタテ条痕とする。この土器は胎土・色調に加えて、施文からも、東海地方の条痕文土器を在地で変容させた、中期の土器である。

土壌 276 甕の口縁部(第87図29)を1点図化した。「く」の字に屈曲した頸部から伸びた口縁端部にヘラ刻み目を加え、外面の頸部をヨコハケ、以下をタテハケとする。中期の土器である。



第86圖 土壇出土土器実測圖 11(縮尺 1/4)

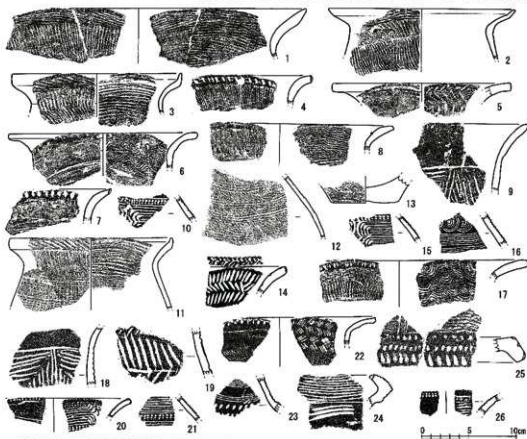


第87圖 土廣出土土器実測図12(縮尺1/4)

土壙 279 壺を2点図化した。上半部だけではあるが特徴的な器形が復元できた壺（第86図1）は胴部から屈曲しないで、そのまま口縁端部となるもので無頸壺（播磨では直口壺）と呼ばれるものである。口縁端部の外側にヘラ刺突を加え、その直下にヘラ刺突列点文を加えた凸帯を2本貼付ける。さらにその下は、タテハケののち櫛描直線文を2段、櫛描波状文1段の下にまた櫛描直線文を施文する。内面はヨコハケのち、一部にユビオサエを残す。このような壺は、北陸はもちろん、隣接する近江や丹後にも類例はなく、同じような器形の無頸壺は摂津に一部ある。しかし口縁部に凸帯を貼付けるなどして、最も近い文様などがあるのは、西播磨以西の備前などを中心とする中部瀬戸内の類例に近い。しかし胎土などは在地のものに類似し、搬入品であるとは言えない。もうひとつの壺は口縁部片（第88図9）である。開いた口縁部に施文はされないが、頸部以下に沈線で箱重文、もしくは山形文を施文する。いずれも中期の土器である。

土壙 283 広口壺の口縁部（第87図32）を1点図化した。幅広の口縁端面に波状文、下端にヘラ刺突を加える。中期の土器である。

土壙 285 甕の口縁部を2点図化した。いずれも口縁部をヨコハケで幅広として摘み上げ、以下をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文とする。しかし口縁部が広く伸びてさらに山形口縁



第88図 十廣川土器実測図13(縮尺1/4)

とするもの（第87図35）と、伸びないで幅広の口縁帯のみとするもの（第87図36）の2つのタイプである。いずれも中期の土器である。

土壌288 甕の口縁部（第87図33）を1点図化した。I縁端面に櫛描波状文ののち、上下両端にヘラ刻みIを加え、外面をタテハケ、内面に波状文を施文する。中期の土器である。

土壌290 甕の口縁部を3点図化した。2点は口縁内面をヨコハケののち波状文を施文するものであるが、外面をタテハケのみとするもの（第88図8）と、タテハケののち頸部にヨコハケを施文するもの（第88図6）に分かれる。もうひとつは口縁端部にヘラ刻み目を加えるものである（第88図7）。いずれも中期の土器である。

土壌291 甕の胴部片1点と甕2点と高坏1点の合計4点を図化した。甕の胴部片（第88図10）は小片で文様の全体が不明であるが、刺突列点文の下に沈線で擬流水文としたものであろう。甕はいずれも口縁端部に波状に近いヨコハケ、外面をタテハケののち頸部にヨコハケ、内面はヨコハケののち波状文と全く同じ施文・調整である。しかしI径がやや大きく、I縁の開きが小さいもの（第86図11）と、I径がやや小さく、I縁の開きが前者より大きく、厚手であるもの（第86図7）となり、別個体である。高坏（第86図9）は、脚下半となる裾の部分を欠く。坏底部から直線的に口縁が立上がる。3つある脚の円孔の位置が一般的なものと比較すると高い。先の甕が中期でも前半で、この高坏は後期のものであり、この土壌は2時期の土壌が重複したものか、どちらかが混入したものであろう。

土壌292 甕の口縁部と胴部片、底部の各1点、甕の口縁部1点の合計4点を図化した。甕口縁部（第88図14）はI縁端面にヘラ羽状刺突列点文、I縁内面にもヘラ羽状刺突列点文を施文する。甕の胴部片（第88図12）はタテハケののち櫛描直線文（3本）を4段施文する。甕の底部（第88図13）はタテハケののち、底部からの立上りをヨコハケとする。甕（第88図11）は口縁部をヨコハケで幅広として上へ立上げ、以下をタテハケののちヨコハケ、内面をヨコハケとする。いずれも中期の土器である。

土壌293 甕の胴部片2点と甕のI縁部1点の合計3点を図化した。甕の胴部片は土壌291のものと同じく小片で文様の全体が不明であるが、刺突列点文の下に沈線で擬流水文としたもの（第88図15）と、円弧を重ねるような扇形文の下に櫛描直線文を施文するもの（第88図16）である。甕のI縁部（第88図17）は、I縁端部にヘラ刺突を加え、以下をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文を施文する。いずれも中期の土器であらう。

土壌294 甕の口縁部（第83図4）を1点図化した。受口状口縁の立上りにヘラ刺突列点文を加える。後期の土器である。

土壌295 甕8点、甕3点の合計11点を図化した。胴部の下半を欠く甕（第86図5）は丸い胴部に長く伸びた頸部から短いが大きく開くI縁部となる。I縁端面にはヘラ刺突を加え、長い頸部から胴部上半に櫛描直線文と櫛描波状文を交互に施文する。胴部外面にはタテミガキ、内面にはタテハケを一部に残す。I縁部のみで、大きく開く甕（第86図2）は、幅広の口縁の下端に刻

み目を加える。外面をタテハケのち櫛描直線文、内面をヨコハケとする。口縁部から頸部の壺（第86図8）は長胴から頸部がほとんど屈曲せず、口縁部も大きく開かない。口縁端部の上下両端面にヘラ連続刺突列点文を加える。外面をタテハケ、内面をヨコハケとする。壺にはこのほか破片で図化したものがある。口縁部のものは内面に刺突列点文と沈線で擬流水文を施文したもの（第88図20）と、袋状口縁の外面に横の沈線文を重ねるもの（第88図24）の2点がある。胴部上半の破片には口縁部の破片と同じように、刺突列点文に沈線文を施文するもの（第88図21）と、頸部の屈曲部にヘラ刺突列点文、立上がった頸部に櫛描直線文を施文するもの（第88図23）の2点がある。また頸部片には沈線で箱重文を施文するもの（第88図18）もある。甕には裝飾が著しいもの（第86図3）がある。あまり大きく張らない胴部から口縁部が開き、端面にヘラ刺突を加える。胴部外面はタテハケのち胴部全体にヘラ沈線で箱重文を施文し、口縁内面には竹管文5段を巡らせる。沈線の箱重文は、既述のものから後述するものを含めて、いずれも壺と思われる器形にあるもので、甕と考えられるものはこの1点のみである。もう1点の甕（第86図4）は弱く「く」の字に屈曲した頸部から開いた口縁部の端面にヘラ刻み目を加える。口縁部外面はヨコハケ、胴部はタテハケのち刺突列点文を施文する。内面はヨコハケとする。口縁部片（第88図22）でも口縁端部にヘラ刻み目に加え、内面に羽状の斜行短線を2段施文するものは、本遺跡でこのほかには見当たらない。いずれも中期の土器である。

土壺 296 壺（第86図6）の口縁部を1点図化した。長く伸びた頸部から大きく口縁部が開くもので、口縁部直下に櫛描直線文、刺突列点文を重ねて3段施文する。口縁部内面には櫛描波状文を施文する。中期の上器であろう。

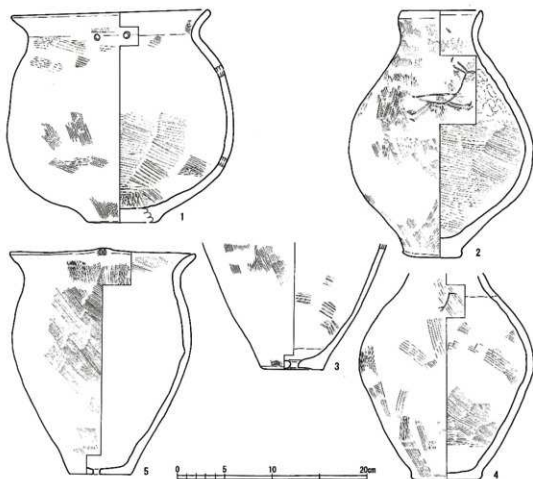
土壺 297 壺と甕の口縁部それぞれ1点ずつの合計2点を図化した。壺の口縁部（第88図25）は口縁端部が垂下する広口壺と考えられる。口縁端面にヘラ刺突列点文を3段加え、内面に波状文を施文するが、これを直線文で縦に切る。甕の口縁部（第87図34）は胴部から屈曲しないで口縁部となる、本遺跡では珍しい条痕文系の甕（深鉢）である。外面をヨコ条痕、口縁部内面に太い櫛描直線文を施文する。いずれも中期の土器である。

土壺 298 壺の口縁部（第87図37）を1点図化した。胴部から屈曲しない頸部を経て小さく開く口縁部となる。口縁端面に下からの刺突を加え、以下をタテハケとする。中期の土器である。

土壺 299 壺の口縁部（第88図26）を1点図化した。小片であるが、口縁部の一部であると考えられる。内面に刺突列点文と沈線文を施文する。中期の土器である。

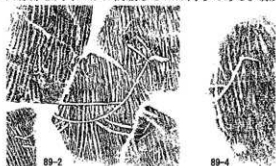
土壺 305 壺（第86図10）を1点図化した。ほぼ完形に復元されたもので、大きく張らない胴部から頸部はほとんど屈曲しないで小さな口縁部が開く。外面をタテハケ、内面には一部ナメハケを残す。中期の土器である。

土壺 306 壺2点、甕1点、鉢1点の合計4点を図化した。壺で口縁部まで残り、完形に復元できたもの（第89図2）は、やや突出した底部から立上がった胴部の最大径が、やや下半に位置する若干下膨れの器形である。頸部がほとんど屈曲しないで口縁が立上がる。口縁端部をヨコナデ



第89図 土壇出土土器実測図14(縮尺1/4)

でやや先細りし、全体の外面をタテハケ、内面をヨコハケとする。胴部上半に「鹿」が線刻される。線刻のある甕はもう1点(第89図4)あり、口縁部を欠くほかは調整などほぼ同じである。線刻は一部分しか残されていなく、こちらも「鹿」と考えられる。甕(第89図3)は底部から胴部下半のもので、外面タテハケ、内面ヨコハケとする。底部に焼成後穿孔する。鉢(第89図1)は底部の一部を欠くのみである。底部から丸くずんぐりした胴部に、ゆるく屈曲した頭部から短く口縁が開く。胴部外面の下半をタテハケ、上半を



第90図 土壇306出土絵画上器拓本(縮尺1/2)

ヨコハケ、内面下半をヨコハケとする。頸部には焼成前にあけられた孔が2個1対並ぶ。

この土壌は施が線刻された壺が2点も出土している。しかしその時期を特定できるような文様のあるものは確認されず、ここでは壺や鉢などの器形から中期後葉と大まかな時期を比定するのにとどまる。

土壌 307 壺は口縁部片と胴部片の2点、甕2点の合計4点を図化した。壺の口縁部(第92図9)は口縁端面に櫛刺突を加え、上下両端面にヘラ刺突を加える。内面の端部に刺突列点文に羽状櫛刺突列点文を施文後、円形浮文を貼付け、その下に焼成後の穿孔を行う。壺の胴部片(第92図7)は沈線をはさんで羽状沈線を重ねるものである。甕は口縁部に刺突を加え、内面をヨコハケののち波状文を施文するもの(第92図6)と、口縁部をヨコハケで幅広として摘み上げ、以下をタテハケするもの(第92図8)の2点である。いずれも中期の土器である。

土壌 308 鉢1点(第92図3)を図化した。張らない胴部から「ハ」の字に口縁部が開く。中期の土器である。

土壌 310 甕1点(第92図4)を図化した。口縁端部に刺突を加え、頸部外面に櫛描直線文(4本)を2段施文する。中期の土器である。

土壌 312 壺1点と甕1点の合計2点を図化した。壺(第92図1)は口縁に無文の端面をつくり、頸部外面には櫛描直線文を施文する。甕は口縁部(第92図2)で外面タテハケ、内面ヨコハケののち波状文とする。いずれも中期の土器である。

土壌 314 甕(第86図12)1点を図化した。受口状口縁の立上り、および頸部から口縁部への屈曲も弱い。口縁外面に櫛刺突列点文を加え、胴部には櫛描直線文と櫛描波状文を施文する。胴部内面にはヨコナデを残す。胎土から近江の受口状口縁を在地で模倣した、中期の甕である。

土壌 315 甕(第86図13)を1点図化した。口縁部をヨコハケで幅広として摘み上げ、以下をタテハケののちヨコハケ、内面をヨコハケとする。中期の土器である。

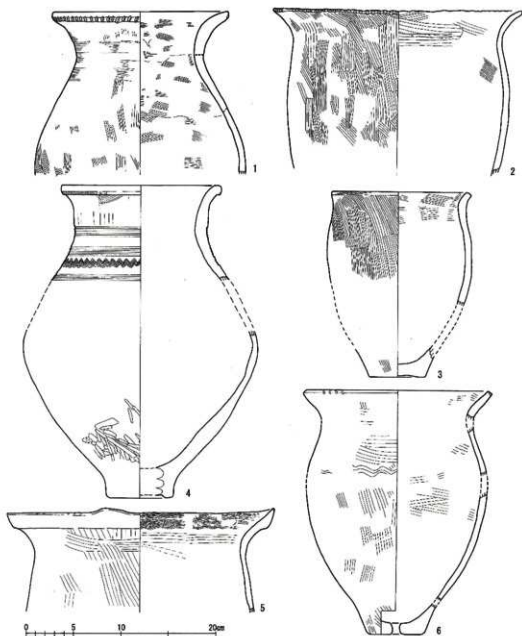
土壌 316 壺1点と甕2点の合計3点を図化した。壺(第91図1)は口縁部から胴部上半のもので弱く屈曲した頸部から開いた口縁の端面の下端にヘラ刺突を加える。外面の頸部をヨコハケ、胴部をタテハケ、内面をヨコハケとする。甕(第91図6)ではほぼ完形に復元できたのは胴部最大径がほぼ中央に位置し、弱く屈曲した頸部から小さく開く口縁端部にヘラ刻み目を加える。胴部外面をタテハケののち上半に弱い波状文を残し、内面のヨコハケも微かに残る程度である。もう1点の甕(第91図2)は胴部下半を欠くが、前述の甕より調整等はよくわかり、ほぼ同じようなものである。いずれも中期の土器である。

土壌 317 甕1点を図化した。甕(第89図5)は完形に復元できた。胴部最大径はやや上に位置し、小さく開いた口縁端部に2個1対のヘラ刺突を加える。胴部外面をタテハケ、内面は口縁部をヨコハケとする。底部に焼成後の穿孔がある。中期の土器である。

土壌 318 甕(第91図5)1点を図化した。口縁部を山形とするが、このほかに多くあるようなヨコハケで上へ全体を盛り上げるように行うのではなく、しっかり面をつくった端面を横方向

に全体に突出させ、甕の上面から見ると突出が角張るように見える。外面をタテハケののち、頸部に櫛描直線文形、内面をヨコハケののち波状文を施文する。中期の土器である。

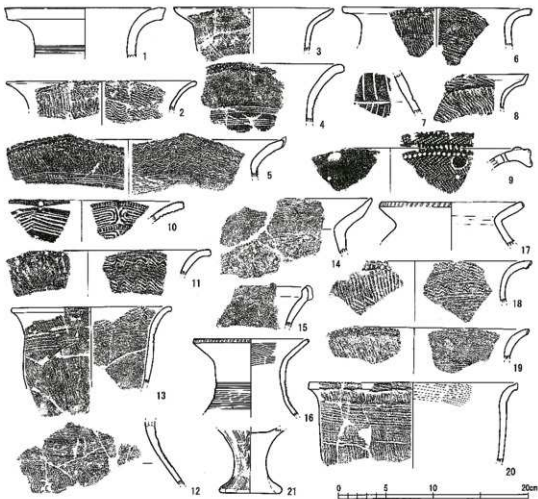
土壙 319 壺と甕の口縁部の2点を図化した。壺(第92図10)は水平に突出させた頂部に円形の刺突を加える。口縁下端にヘラ沈線を7本施文する。内面は4本の沈線の楕円文様をヘラ刺突列点文ではさむ。甕(第92図11)は外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文とする。



第91図 土壙出土土器実測図15(縮尺1/4)

いずれも中期の土器である。

土庫 320 壺3点、甕5点の合計8点を図化した。口縁部から頸部までである壺（第92図16）は長く伸びた頸部から「ハ」の字状に口縁が開き、端部にヘラ刺突を加える。頸部には櫛描直線文が3段重ねて施文される。口縁部内面をヨコハケとする。袋状口縁（第92図15）には口縁の外端面に櫛描波状文を施文後、棒状浮文を貼付ける。外面をタテハケとする。もうひとつの壺としたもの（第92図17）は、頸部が「く」の字に屈曲するもので、口縁端部にヘラ刺突を加える。ここでは壺としたが、その器形全体とともに不明な土器である。甕の口縁端部をヨコハケで幅広とするもの（第92図14）は、器壁が厚手で大型になるかもしれない。口縁部片のものは口縁端部にヘラ刺突を加え、外面をタテハケ、内面をヨコハケのち波状文とするものであるが、施文具が太いもの（第92図18）と、細いもの（第92図19）の2種類ある。口縁部から胴部まで残された甕（第92図20）は、外面タテハケを基本とするが、口縁端部が異なる。口縁端部を摘み上げて端面をつくるものは頸部



第92図 十廣出土土器実測図16(縮尺1/4)

の直線文を2段ほど重ね、内面はヨコハケのみとする。口縁端部を丸くするもの(第92図12)は頸部の直線文は弱い、内面にヨコハケののち波状文を施文する。頸部が「く」の字に屈曲する壺(第92図17)は、中期である類例はないが、そのほかの7点はいずれも中期の土器である。

土壌 328 壺の頸部片(第92図13)を1点図化した。外面にタテハケののち櫛描直線文、内面に櫛描波状文を施文する。中期の土器である。

土壌 331 甕の口縁部片(第93図1)を1点図化した。外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文とする。中期の土器である。

土壌 336 壺1点、甕の口縁部片2点、高坏脚部1点の合計4点を図化した。壺は口縁部から肩部まで残るもの(第93図9)で、胴部から屈曲しないで口縁部が立上り、上端面を押さえる。外面をタテハケとする。甕は頸部がやや強く屈曲するもの(第93図8)は、口縁端部にヘラ刺突を加え、ナメハケとする。頸部が丸く外反するもの(第93図6)は口縁端部にヘラ刺突を加え、以下の外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文とする。高坏脚部(第93図7)は棒状脚の筒部で、ほかの3点と時期があわない後期に属するものである。そのほかの3点は、いずれも中期の土器である。

土壌 338 壺2点と甕の口縁部片1点の合計3点を図化した。壺はいずれも頸部に櫛描直線文を施文するものであるが、口縁が開いて端部に面をつくるもの(第93図2)と、上へ開いた口縁部の上へ櫛描直線文を施文するもの(第93図3)がある。甕の口縁部片(第93図4)は口縁端部にヘラ刺突を加え、外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文とする。いずれも中期の土器である。

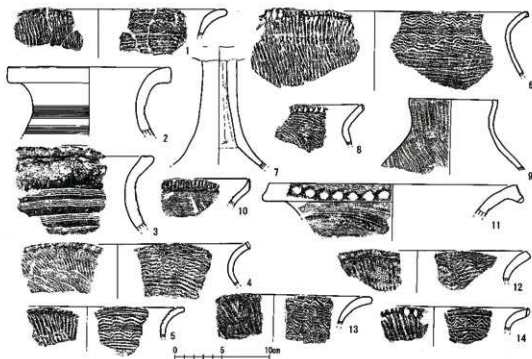
土壌 339 壺の口縁部を2点図化した。口径が大型と小型のもので、小型のもの(第93図10)は口縁端部を上へ摘み上げて幅広とし、櫛刺突列点文を加える。大型のもの(第93図11)は頸部から大きく開いた口縁端部を下へ垂下させ、櫛描直線文ののちに下端を連続指押圧する。頸部外面は荒いヨコハケとする。いずれも中期の土器である。

土壌 342 高坏の脚部とおぼしきもの(第92図21)を1点図化した。中実の筒部から裾が大きく開かないものであり、坏部が大きくない碗状のものになると考えられる。外面をタテハケとする。中期の土器と考えられる。

土壌 345 甕の口縁部片(第93図5)を1点図化した。口縁端部をヨコハケ、以下の外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文とする。中期の土器である。

土壌 346 壺1点を図化した。壺(第91図4)は胴部上半の一部を欠くが、器形は想定できた。厚く高い底部から伸びた胴部は最大径をほぼ中央に位置すると思われる。口縁端部を外へ肥厚させて、下端に刺突列点文を加える。頸部には櫛描直線文と櫛描波状文を施文する。外面はタテミガキを一部に残す。中期の土器である。

土壌 347 甕の口縁部片を3点図化した。いずれも外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文とする。口縁端面をヨコナデで面をつくるもの(第93図12)、口縁端部を丸くするもの(第93



第93図 十廣出土土器実測図17(縮尺 1/4)

図13)、口縁端部にヘラ刺突を加えるもの(第93図14)である。いずれも中期の土器である。

(3) 溝出土の土器

本遺跡でもっとも土器の出土が多かったのが、溝からのものである。しかし、集落内を流れる溝からは、特定の時期に限定できるものが出土している状況はうかがえなかった。特に、溝11から出土した土器がもっとも多く、完形に近く復元できた土器や、他地域からの搬入品と思しき土器が非常に目立つ。ここでは、完形に近く復元できた土器を中心に、破片でも特長的な土器を図化して示す。

溝4 底部を欠くが、器形がうかがえる壺(第95図2)がある。長い胴部から立上がった口縁に沈線を施文しヨコナデする。胴部から頸部の外面をタテハケののち、頸部に刺突列点文を加える。内面は頸部をヨコハケとする。中期後葉の上器であろう。

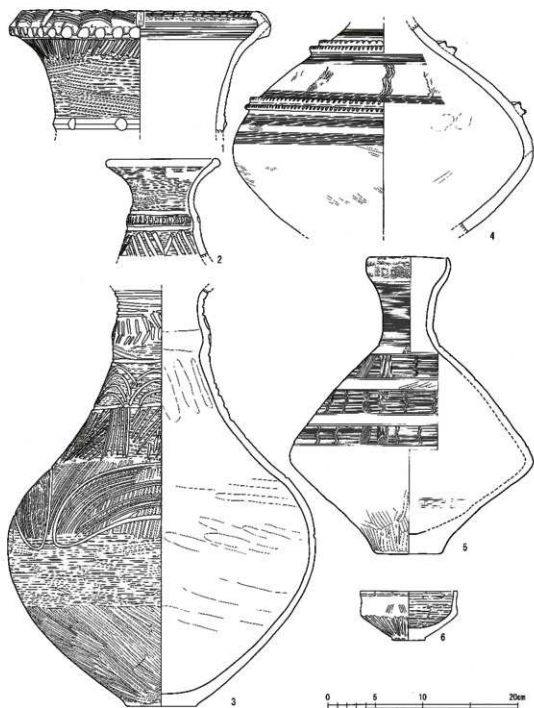
溝5 この溝から出土した土器で図化できたのは、小型の鉢(第94図6)と円形浮文を貼付けた壺の口縁(第99図3)の2点である。いずれも後期の土器である。

溝7 この溝から出土した土器で図化できたのは、口縁端部にヘラ刺突を加えた壺(第99図2)の1点で、中期の上器である。

溝9 この溝から出土した土器で図化できたのは、頸部に巡る刺突列点文の上にナナメに沈線を施文する頸部片(第99図5)の1点で、中期の上器である。

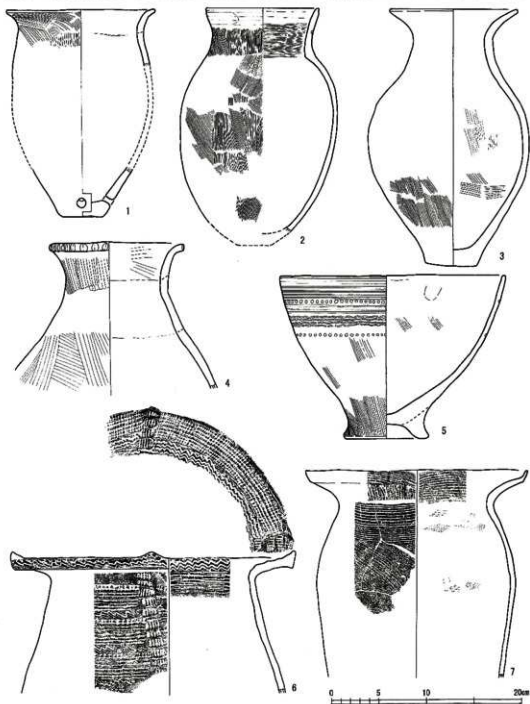
溝 11 遺構としてもっとも多くの上器が出土した溝である。この溝 11 からは大量の土器が出土しているとともに、器形がうかがえるまで復元された土器が多い。その中でも特に明らかな搬入品と考えられるものもいくつかあって、すでに概報で取上げられたものもあるが、ここでは図とともに再度取上げる。また溝 11 は北に位置する溝 16 につながり、その境が明確ではなく、溝 11 の土器に溝 16 の土器が接合したりしている。ここでは溝 11 と 16 は注記にしたがって分けて取り扱うが、基本的にはその差はないものと考えている。

まず注目されるのが、今回確認した土器で最も古い様相を示す甕である。I 1 縁部と底部を欠く壺（第 94 図 4）は、イチジクのようにすばまった頸部に櫛描直線文の下に貼付凸帯を 2 条にして刻みを加え、さらにその下に櫛描直線文を施文する。同じような文様帯を胴部上半にも行い、その間の無文帯は縦の櫛描波状文でつなぐ。遠賀川式土器の名残を大きく残すものである。また胎土や色調、さらに調整具と手法からも東海三河地方からの搬入と考えられる壺の口縁部（第 94 図 1）がある。袋羽状口縁の内外面に貝殻による押し引きの直線文や波状文を施文し、口縁部外面に棒状浮文を貼付、口縁への立上りに連続指押圧を加える。頸部に凸帯を貼付け、口縁との間をタテ条痕、その下をヨコ条痕で調整する。濃尾平野で見かける沈線で文様帯を構成する壺もある。口縁部のもの（第 94 図 2）は小さく開いた口縁部直下をヨコ条痕、頸部に器壁全体を彫らませてヘラ刻みを加え、その下に沈線で山形文とする。同じタイプの壺であるが、I 1 縁部を欠くもの（第 94 図 3）は前者のものより幅が広い頸部の突出に、ヘラ羽状刺突列点文を施文する。胴部につながる頸部には沈線の連線を下向きに重ね、沈線で区画して沈線の山形文とする。さらに胴部上半をタテミガキ、中位をヨコミガキ、下半をナナメミガキのちに、沈線で弧状に囲み、連線を重ねたもので充填する。この沈線文の壺 2 点も胎土・色調、さらに施文具とその手法から東海地方からの搬入品と考えられる。ほぼ完形に復元された細頸壺（第 94 図 5）は包含層出土となっているが、その位置から溝 11 に伴うものではないかと考えられる。算盤球形の胴部から立上がった頸部が長く伸びて、腰りみながら袋状口縁となる。口縁部外面には櫛描波状文が、頸部には全面に櫛描直線文が数段重ねられる。胴部上半には無文帯をはさんで 2 段に重ねられた櫛描直線文を縦に櫛描波状文で区切る。いわゆる東海地方の貝田町式に典型的なものである。この土器も色調・胎土に加え、施文具とその手法から、搬入品と考えられるが、胴部最大径の位置が尾張地方に特有なものとは異なることが指摘されている。最近の事例から尾張平野よりやや手前の美濃の平野部である可能性が高いものと考えられる。胎土や色調から搬入品ではないが、鉢（第 95 図 5）の I 1 縁に櫛描直線文と櫛描波状文に刺突列点文を加えるものなどは、山陰から丹後の日本海地域の影響を何うことができる。甕についてはこれまで器形が何えるまで復元されたものなどを上壊などで取上げてきたので、あえて多くを取上げないが、破片で多く確認したものはいわゆる「ハケ壺」（第 98 図 29・30）と近江系の甕（第 98 図 23）であることは当然の状況である。ここでは近江系の甕については特異なもの 2 点を取上げる。近江系の甕（第 95 図 6）ではあるが、口縁上端の一部を盛り上げた山形口縁で、幅広の I 1 縁端部に波状文を施文する。外面には頸部から胴部と



第94圖 溝出上土器実測図1(縮尺1/4)

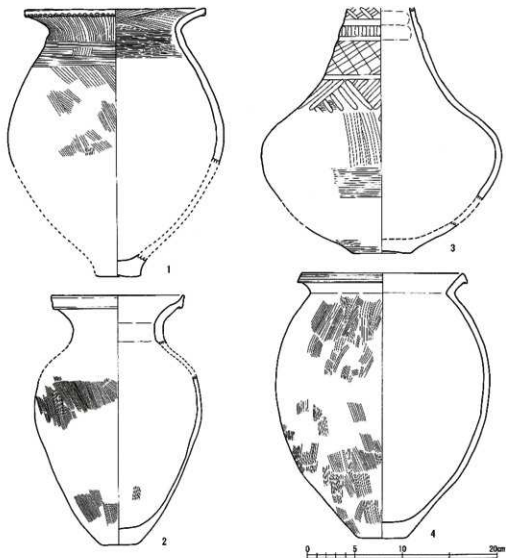
半に刺突列点文と直線文と波状文を施した文様帯を3段重ね、これを刺突列で縦に切る。口縁内面には刺突列点文を重ねた廉状文に波状文を施し、これも刺突列で縦に切る。もう1点の甕(第



第95図 溝出土土器実測図2(縮尺1/4)

95 図 7) の口縁部は受口状でヨコハケ、頸部以下をタテハケ、またはナナメハケののち横描直線文を 2 段施文し、口縁内面もヨコハケののち波状文とする、一般的近江系であるが、類例がないほど長胴となる。このほかに完形に復元されたものに壺 (第 95 図 3) が 1 点あるが、摩滅が著しく外面下半にタテハケ、内面下半にヨコハケを一部残すのみである。また口縁を強くヨコナデする、器壁の薄い甕 (第 98 図 31) は凹線文系土器へつながるものであるが、本遺跡ではこの時期も近江系の甕が目立ち、このような薄手の甕は非常に少ない。

このほかに器形がうかがえるまで復元はできなかったが、破片でも特異なものが多数出土している。ここではそのすべてについては図化できず、また図化した土器についても個々に説明する



第 96 図 溝出土土器実測図 3 (縮尺 1/4)

こともできないので、非常に特異な土器を中心に、いくつかに別けて説明していきたい。

壺については袋状口縁の条痕文系につながるものが多い。ここでは口縁に箱重文、屈曲する立上りに連続指押圧を加えるもの3点(第98図1・2・8)を図化した。いずれも在地で変容した条痕文系土器と考えられる。広口壺(第98図4)でも口縁端面に櫛描直線文を施文後、その上下両端にヘラ刻み目を加えるものがあるが、口縁内面には束ねたヘラ?の刺突列点文をちりばめるように加えるものがあり、畿内もしくは近江などの状況と同じとはいえない。また太頸の壺(第98図32)には、タテハケの直線文と波状文を太い櫛で施文したものもある。壺においては破片が小さいものの、沈線文系壺、いわゆる尾張の大地式壺は多い。刺突列点文の間を沈線文や箱重文で充填するなど(第97図1・3・4・5)であるが、内面に刺突列点文がなく、箱重文のみであるもの(第98図2)は珍しい。またこの壺に近い胴部として、細い沈線の菱形文を瘤状突起でつなぐもの(第97図9)がある。口縁部には内面に羽状櫛刺突列点文が施文されるもの(第97図7、第98図22)が多く見られ、口縁外面には縦の沈線を重ねるもの(第98図24)もある。壺の胴部片には羽状沈線が施文されるもの(第97図8、第98図9・10・11・12・13・14・15)は目立つためか図化したものが多い。また口縁部の内外面に太いヘラ刺突列点文を何段にも施文する壺(第98図5・6・7・16・17)も目立つが、櫛刺突列点文のもの(第98図19)はこの破片のみである。また口縁部が山形となるもの(第98図33)は、羽状刺突列点文、沈線で区画した周に刺突列点文を充填し、沈線も細い。胴部片には櫛描直線文の下に刺突列点文を巡らせるもの(第98図21)、直線文と波状文を交互に施文するが櫛が太く波状文も大振りであるもの(第98図20)があるが、畿内的な櫛描文系土器ではない。壺でも畿内的な文様の土器について何点か図化した。櫛描直線文に扇形文を施文するもの(第97図6)、櫛描直線文と櫛描波状文を施文するもの(第98図28)、さらにその櫛描直線文の上に円形浮文を貼付けるもの(第98図26)、2本の櫛描直線文を4段重ねた下に扇形文を施文し、上を直線文で区画するもの(第98図25)などあるが、いずれもが点数は多くはなく、また施文が雑であったり、文様も畿内のもとはやや異なるものであったりする。また、櫛描直線文を弧状に縦に区切り、擬流水文を施文した壺の胴部片(第98図3)も、施文が弱く、典型的な櫛描文土器とするにはやや抵抗がある。

溝11では後期の土器もかなり出土している。ここではそのいくつかを図化した。壺は口縁の擬凹線文に円形竹管文を加えるもの(第97図17)、甕はやはり受口状口縁のもの(第97図12)が多数ある。器台は有段口縁の沈線を数条巡らせるもの(第98図13・14)である。

以上、溝11については中期でも前葉の上器から、後期の上器までが出土している。

溝12 この溝から出土した土器で図化できたのは、口縁部内面に櫛刺突列点文を施文する壺(第99図4)の1点で、中期の土器である。

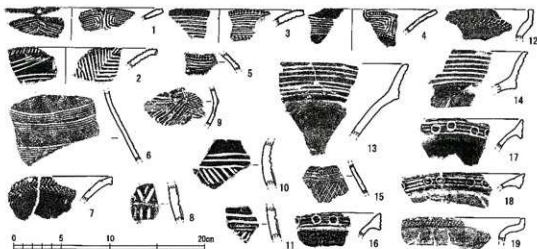
溝14 この溝から出土した土器では、胴部上半の一部は欠くが、口縁が有段となる長胴の壺(第96図2)と、刺突を加えた口縁に山形文を施文する壺(第99図10)の2点である。前者の壺は後期の、後者の壺の破片は中期の土器である。

溝 16 この溝からも溝 11 ほどではないが、中期、後期ともにかなりの土器が出土し、完形に復元されたものがある。中期の甕は口縁端部に刺突を加えた、外面をタテハケとする甕（第 95 図 4）と、口縁下端にヘラ刻み目に加え、外面をタテハケののち頸部にヨコハケ、口縁内面をヨコハケとする甕の調整に近く、頸が太い甕（第 96 図 1）である。甕には口縁部を有段とするまでは立上がないが、「く」の字に屈曲した頸部から短く伸びた口縁部に擬凹線文を施文するもの（第 96 図 4）など、甕とともに後期の土器が目立つ。破片でも有段口縁に擬凹線文を施文して、円形竹管文を加えるもの（第 97 図 16・18）や、受口状口縁甕（第 97 図 19）など後期のものが多い。しかし櫛描直線文の下に斜格子を施文する甕の胴部片（第 97 図 15）と、受口状の口縁であるが、内面に波状文のあるもの（第 99 図 1）、または沈線を羽状に施文する甕（第 99 図 11）は中期のものである。

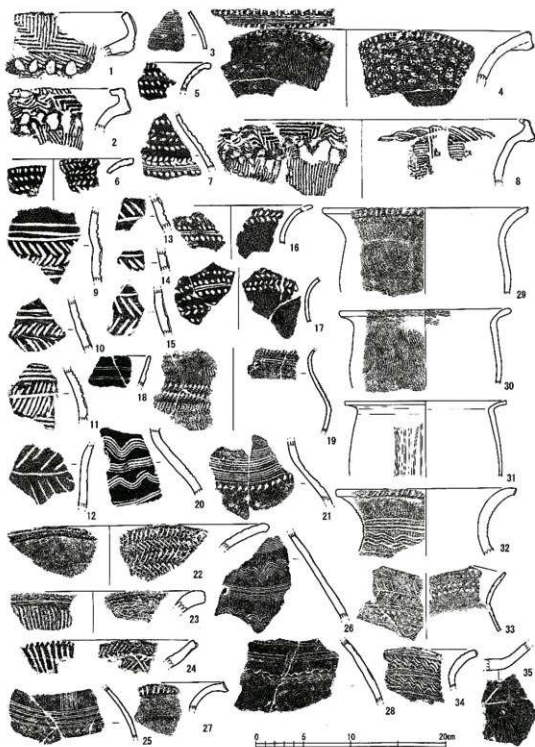
以上、溝 11 と同様に、溝 16 についても後期の破片が多いが、中期と思われる破片も一定量あって、出土土器からは、中期から後期に継続したことがうかがえる。

溝 17 この溝から出土した土器で図化できたのはいずれも甕の口縁と考えられる 4 点である。条痕文系の袋状口縁（第 99 図 7）は口縁端部を欠く。大きく開いた口縁部内面に羽状櫛刺突列点文を 2 段重ねるもの（第 99 図 9）には、瘤状突起を 2 個 1 対貼付ける。また口縁端部にヘラで山形文を施文するもの（第 99 図 6）は、口縁端面にヘラ刺突を加えたのち、外面はタテハケである。さらに内面に沈線を重ねた櫛門文を巡らすもの（第 99 図 8）は、この 1 点のみ確認された。いずれも中期の土器である。

溝 19 この溝から出土した土器で図化できたのは、甕の口縁部（第 99 図 13）1 点である。口縁端部にヘラ刺突を加え、外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文とする。中期の土器である。



第 97 図 溝出土土器実測図 4（縮尺 1/4）



第98圖 溝出上器実測図5(縮尺1/4)

溝 26 この溝から出土した土器で図化できたのは、甕の口縁部と考えられるもの（第99図12）が1点である。口縁と頸部に加えた刺突列点文で区画した中に沈線の山形文を充填する。中期の土器である。

溝 32 この溝から出土した土器で図化できたのは、甕の口縁部2点と胴部片の合計3点である。口縁部は内面に羽状櫛刺突列点文を施文後、瘤状突起を貼付けるもの（第99図16）と、口縁端部が小さい、いわゆる無頸壺とされるもの（第99図21）で、頸部に2個1対の円孔が焼成前にあく。胴部片（第99図17）は1本の沈線をはさんで、羽状沈線を施文する。無頸壺は時期を特定できないが、ほかの2点は中期の土器である。

溝 35 この溝から出土した土器で図化できたのは、口縁下端と頸部に櫛刺突列点文を施文した受口状口縁の甕（第99図14）の1点で、後期の土器である。

溝 36 この溝から出土した土器で図化できたのは、沈線の間に太いヘラ刺突列点文を施文する点の胴部片（第99図15）の1点で、中期の土器である。

溝 45 この溝から出土した土器で図化できたのは、壺の口縁部でも口縁帯になると考えられる破片（第99図19）である。沈線の稍重ね内部と口縁上端に刺突列点文を加える。中期の上器である。

溝 46 水差し形甕の把手やハケ調整の高坏の破片を確認したが、破片が小さく図化しえなかった。時期は中期と考えられる。

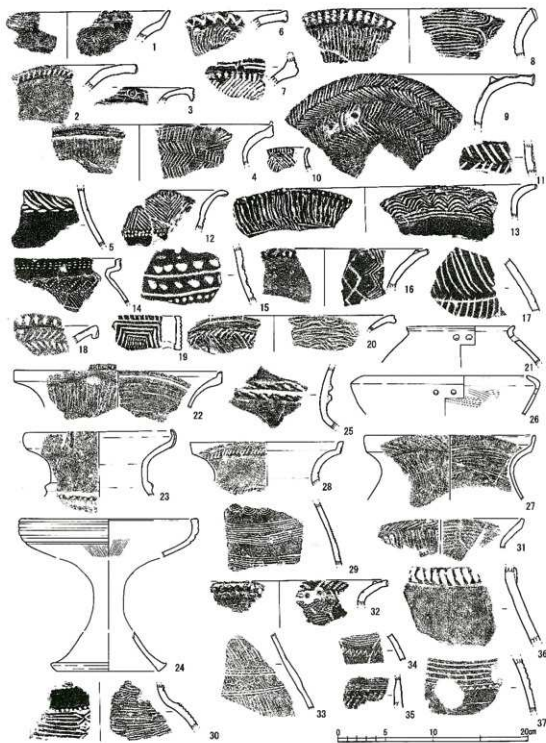
溝 47 この溝から出土した土器で図化できたのは壺3点と高坏1点の合計4点である。壺は口縁部が2点あり、受口状口縁のもの（第99図22）は口縁帯をヨコハケ、頸部外面をタテハケ、内面をヨコハケと甕と同じくするが、口縁端面に刺突列点文を加える。頸部も小さくすままる。もう1点の口縁部（第99図23）は、やや袋状の口縁帯に棒状浮文（2本か？）を貼付け、頸部に刺突を加えた貼付凸帯を巡らす。もう1点の甕は頸部片（第99図25）で、その頸部の中央にヘラ刺突を加えた凸帯を2条貼り付ける。高坏（第99図24）は坏部の一部と脚部の一部で、筒部はないが、胎土と色調から同一個体であると判断した。丸く内湾する坏部口縁に4条の凹線文を施文する。脚端部は上へ揃み上げて端面をつくる。甕と同じ中期後葉の良好な資料であろう。

溝 51 この溝から出土した土器で図化できたのは、壺の口縁部（第99図18）の1点である。口縁端面の下端にヘラ刺突を加え、内面にもヘラ刺突列点文を施文する。中期の土器である。

溝 63 この溝から出土した土器で図化できたのは、壺と鉢の口縁部の2点である。壺（第99図27）は受口状口縁で口縁帯をヨコハケ、頸部をタテハケ、内面をヨコハケとする。鉢は胴部から口縁部が短く屈曲するもの（第99図26）で、屈曲の直下に2個1対の円孔を焼成前にあける。いずれも中期後葉の土器と考えられる。

溝 73 この溝から出土した土器で図化できたのは、壺の口縁部と考えられるもの（第99図28）が1点である。受口状口縁の下端と頸部に櫛刺突列点文を施文する。後期の土器である。

溝 83 この溝から出土した土器で図化できたのは、甕の口縁部と考えられるもの（第99図



第99圖 滑出土器実測圖6(縮尺1/4)

31) が1点である。口縁をヨコハケで幅広とし、以下をタテハケ、内面をヨコハケとする。中期の土器である。

溝 87 この溝から出土した土器で図化できたのは、壺の胴部片（第99図29）の1点である。扇形文を重ねて連続し、櫛描直線文を数段重ねて施文する。中期の土器であろうか。

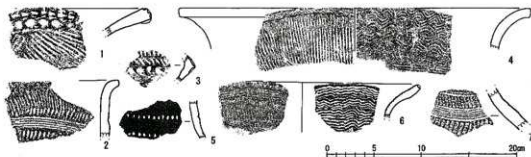
溝 89 この溝から出土した土器で図化できたのは、壺の胴部片（第99図37）の1点である。数条の沈線の下に三角の刺突列点文を施文する。中期でも前葉と古い時期の土器である。

溝 94 この溝から出土した土器で図化できたのは、甕の口縁部（第99図20）の1点である。口縁端面をヨコハケ、以下を外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文とする。中期の土器である。

溝 106 ほとんどの破片を確認したが、その多くが中期と思われるハケ調整、ハケ条痕のもので、明らかに後期と判断された破片は非常に少なかった。図化したのはいずれも中期の破片で、甕4点、甕3点の合計7点である。甕の口縁部は大きく開いた口縁端部にヘラ刺突列点文を加えるもの（第100図1）と、口縁端部を欠く、条痕文系の袋状口縁（第100図3）である。このほかに櫛描直線文と櫛刺突列点文を施文した胴部片（第100図7）と、ヘラ刺突列点文を2段施文した胴部片（第100図5）がある。甕の2点は外面をタテハケ、内面にヨコハケののち波状文とするが、口縁端部に波状文を施文するもの（第100図4）と、ヘラ刻み目を加えるもの（第100図6）がある。もう1点は口縁がほとんど開かないもの（第100図2）で、櫛刺突列点文と櫛描直線文を施文する。

溝 107 この溝から出土した土器で図化できたのは、壺の胴部片（第99図36）の1点である。頸部近くに連続指押圧を加えた凸帯を貼付ける。中期の土器である。

また溝の注記はあるが、被災による座滅などで、どの溝か特定できなかったが、特徴的な土器もいくつかある。口縁部を除く部分が復元できた細頸壺（第96図3）は、太い沈線で山形文などを施文する。このほかにも沈線文系壺の胴部片（第99図30）、口縁内面の櫛刺突列点文に瘤状突起を貼付けるもの（第99図32）、太くて本数の少ない櫛描の直線文と波状文を施文するもの（第99図33）、櫛描直線文の下に山形文（第99図34）や、刺突列点文（第99図35）を施文する様々なものがある。



第100図 溝出土土器実測図7（縮尺1/4）

(4) 方形周溝墓出土の土器

方形周溝墓の溝からも土器は多く出土している。そのなかでも、調査段階で出土状況から方形周溝墓に供献された土器として判断された土器について、そのほかの破片とは別にして、先に触れていく。

方形周溝墓1 図化できたのは壺3点と甕1点の合計4点である。南溝から出土した完形に復元された壺(第101図1)は受口状口縁に大きく張る胴部最大径が下半にきて、大きな底部となるものである。口縁部に2段の櫛描波状文、頸部に6段の櫛描直線文、さらに続けて胴部上半に3段の櫛描波状文を施文する。内面は胴部下半にヨコハケを残す。山城地域に多いタイプの壺である。口縁部のみの壺(第101図4)は西溝から出土した。幅広にした口縁部の一部に指押圧を加える。頸部のみの壺(第101図2)は溝の北東隅から出土した。その頸部に櫛描直線文を数段巡らす。甕(第101図3)も溝の北東隅から出土し、底部を欠く、やや小型のものである。以上、溝から出土した土器でもほぼ完形の壺(第101図1)は東海地方の貝田町式に併行する中期中葉と考えられ、そのほかの土器についてもほぼ同時期であると判断される。

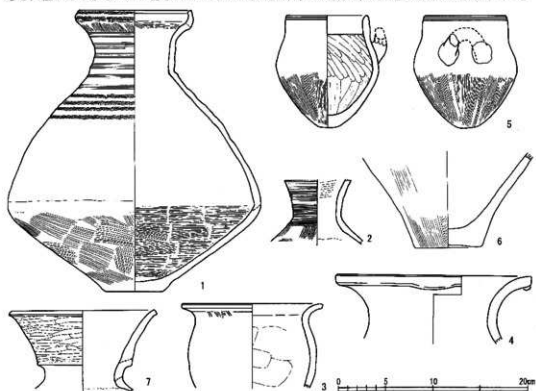
方形周溝墓3 図化できたのはおそらく壺と考えられる底部が1点のみである。やや厚手で、器高の高い壺のものと判断した底部(第101図6)は、その外面をタテハケ調整とする。この壺の底部が周溝墓の時期を示すと考え、あえて時期の判断をするならば、胴部が大きく張らないで、器高の高くなる壺は中期でも前半に頻例が多いものである。

方形周溝墓4 図化できたのは把手が付いた小型の壺(第101図5)が1点である。溝の南東隅で出土した。卵形の胴部から頸部が屈曲しないで口縁部となり、口縁端面に1条の凹線を施文する。把手の一部を欠くものの、半円環形の把手が横位につく。胴部下半をタテハケ、内面は弱いタテズリ調整とする。この土器からこの方形周溝墓は後期のものと考えられる。

方形周溝墓5 図化できたのは壺の口縁部(第101図7)が1点である。溝の南東隅から出土した。頸部から有段とした口縁部の端部に面をつくる。口縁部をヨコミガキする。この土器は今回確認した古河遺跡の堅穴住居から土坑、溝、さらに包含層までを含めたなかで、この土器のみが古墳時代初頭まで下る可能性が高い土器である。よってこの土器がこの方形周溝墓の時期を示すものとは即断できない。

方形周溝墓7 図化できたのは壺6点、甕4点、台付甕1点、高坏3点の合計14点と今回報告する方形周溝墓では供献土器と考えられるものの出土が最も多い。壺は細頸壺が3点と、頸部がそれよりやや太めの3点である。細頸壺の口縁には端部を摘みあげるものと、そのまま開くものの2種類がある。また前者には上へ摘み上げるだけのもの(第103図5)と内側へ摘み上げるもの(第103図8)があり、前者は胴部外面をタテハケ、内面をヨコハケ調整とする。後者は頸部に櫛描直線文を数段施文し、内面はヨコハケ調整とする。胴部下半に焼成後の穿孔を行う。頸部から口縁部がそのまま開くもの(第103図6)は口縁部のみで、外面をタテハケ、内面をヨコハケ調整とする。やや太い頸部の壺は、胴部から口縁部へいたる頸部の屈曲が緩やかなもの2点と、屈曲が明瞭なも

の1点である。いずれも文様はない。頸部の屈曲が緩やかな者には、口縁端部の一部にヘラ刻み目があるもの（第103図1）と、ヨコなで調整のみで無文のもの（第103図2）がある。頸部の屈曲が明瞭な壺（第103図7）は口縁部を欠いたため時期を明確にはできないが、後期のものである可能性もある。甕は4点あるが、ほぼ全形が復元できたもの（第102図1）は1点である。長胴となる胴部の最大径は中ほどより上となる。幅の狭い口縁端面に1条の沈線を巡らせ、胴部外面の上半をタテハケ、下半をナデ、内面をヨコハケとする。この甕は本遺跡で出土した凹線文系の甕として最も典型的なものである。ほかの甕2点はいずれも受口状口縁である。やや大型の甕（第102図2）は受口の立上りが短く、ヨコハケとする。胴部外面はタテハケののち、頸部に弱い櫛描直線文を施文する。やや小型の受口状口縁甕（第102図4）も立ち上げた口縁をヨコハケとする。胴部外面にタテハケののち櫛描直線文を施文する。大型の甕であるが口縁部の一部のみのもの（第103図3）は口縁端面にヨコハケ、外面をタテハケし、内面はヨコハケののち波状文を施文する。小型の白付甕（第103図4）は胴部と脚部とを円盤充填で塞ぐ。口縁端部にヘラ刻み目を加え、胴部外面をタテハケ、内面はナデとする。高坏は埴状の坏部のみのもの2点と脚部のみのものの合計3点である。坏部のみのもの（第102図3）は埴状の坏部から口縁端部が水平に大きく開いて伸びるものである。水平口縁の端面はやや下へさがる。もう1点の埴状の坏部のもの（第102図5）は先のものと比べると口径がやや小さいが、器形はほぼ同じである。脚部との接合部は推定であるが、次第に「ハ」

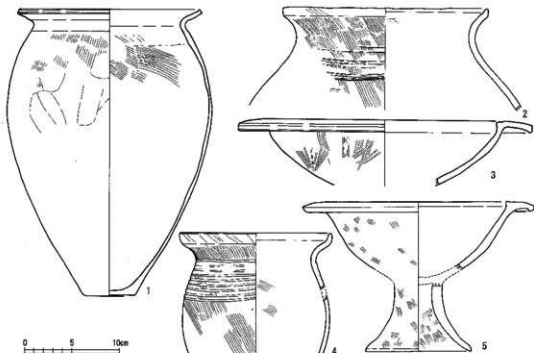


第101図 方形周溝墓出土土器実測図1（縮尺1/4）

の字状に開いて端部となる短い脚である。脚部のみのも（第103図9）は棒状の筒部から緩やかに開いて峯となる。この脚は後期に特徴的なものである。

埋葬施設（土壌64）出土の土器 この方形周溝墓の埋葬施設と考えられる土壌から2点の土器を図化した。壺（第104図1）は頸部より上の口縁部を欠く。胴部最大径が下に位置する、やや下膨れの器形である。外面調整はヨコハケが僅かに残る。甕でも甕に近い器形の土器（第104図2）は、頸部から緩やかに外反して開く。口縁部の端面を指押圧で4箇所を上方へ盛り上げる。頸部は微かにタテハケが残る無文とし、その下の胴部にヘラで箱重文を並べて、その上端を押圧する。沈線文系土器の影響を残したものと考えられる。

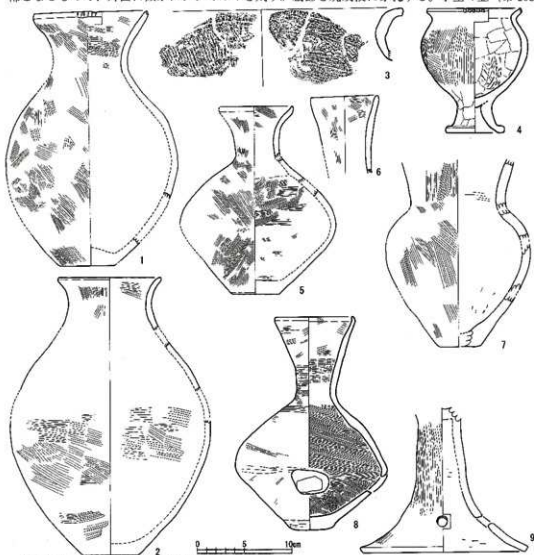
埋葬施設から出土した土器でも、沈線文系の影響を残す壺（第104図2）は、周溝から出土している高坏などの土器よりやや古い時期を示す。同じ埋葬施設から出土している甕は無文であるが、下膨れの器形から判断すると、周溝から出土した甕や高坏にほぼ同時期ではないかと考えられる。高坏に後期のものと考えられる土器があり、それらを混入とすると、そのほかの土器で方形周溝墓の時期を示すのは細頸壺2点（第103図5・8）、ほぼ完形となった甕（第102図1）、受口状口縁の甕2点（第102図2・4）、坏部のある高坏2点（第102図3・5）、そして台付甕（第103図4）である。甕や甕に加えて、台付甕の接合部を凹壁充填していることから、この方形周溝墓の時期は中期でも後葉と考えられる。そして集落域に近接することから、溝が完全に埋まりきらないうちに、先に後期とした土器1点が溝の覆土に混入したものと考えたい。また大型の甕口



第102図 方形周溝墓出土土器実測図2（縮尺1/4）

縁部片（第103図3）については、方形周溝墓に先行する時期のもので、周辺の遺構の覆土から入り込んだものであろう。

方形周溝墓9 図化できたのは埋葬施設から出土した壺と甕の2点と、西溝から出土した小型の甕1点の合計3点である。埋葬施設から出土した壺はいわゆる広口壺（第105図1）で、口縁端面に櫛描直線文のち上下両端にヘラ刺突列点文を加える。太い頸部には櫛描直線文を数段重ね、胴部上半と中には2段の櫛描直線文をそれぞれ両向かいに扇形文で切る。それらの文様帯の間は横方向のヘラ磨きを丁寧に施す。胴部内面はヨコハケである。底部全体を焼成後に打ち欠く。また胴部下半しか出土しなかったが、甕の下半と考えられるもの（第105図2）は直立気味の胴部となるもので、外面に微かにタテミガキを残す。底部を焼成後に穿孔する。小型の甕（第105



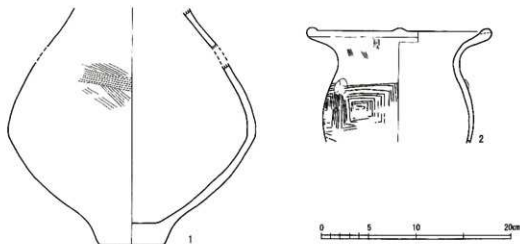
第103図 方形周溝墓出土土器実測図3（縮尺1/4）

図3)は口縁内面に瘤状突起のあるもので、胴部をタテハケののち頸部に横描直線文を数条巡らす。2点の壺は中期中葉の時期と考えられる。

方形周溝墓 10 図化できたのは壺と別個体とした壺の底部の2点である。袋状口縁の壺(第105図4)は底部を除き完形に復元できた。袋状口縁でも口縁部そのものが明瞭ではなく、脹らんだ口縁帯がそのまま内湾して口縁端部となる。全面に、斜め、もしくは縦に具段ではなく櫛の条痕で調整したあと、頸部と胴部上半に横描直線文を重ねる。底部を打ち欠いて欠損したとすれば、方形周溝墓への供献土器であり、条痕文系本来のものとは大きく変化しているが、条痕文系の土器が供献されたものとして注目されよう。この壺は中期中葉の時期と考えられる。底部片(第105図5)は底部から胴部へ大きく開くことから壺と判断した。内外面とも摩滅が著しく、調整等も不明で、先の条痕文系壺のもの可能性もあるが、全く判断できない。またこの方形周溝墓の溝からは大型の壺棺が出土している。これについては方形周溝墓の最後に述べる。

方形周溝墓 11 図化できたのは壺3点である。南溝から出土した壺(第106図1)はやや長くなった頸部から外反して口縁となるもので、外面は頸部から胴部上半をタテハケ、下半をタテミガキ、内面はヨコハケを行う。東溝から出土した壺(第106図2)は頸部より上の口縁部を欠く。胴部上半にタテハケののち、横描直線文を重ねて3段施文する。内面の下半はヨコハケを行う。もう1点の壺(第106図3)は頸部からゆるく外反して口縁となり、口縁端面に平坦面をつくる。胴部外面をタテハケののち、頸部の一部を横にミガキ、胴部をタテミガキとする。内面はタテハケののち底部付近を指押さえる。これらの壺の時期は中期中葉と考えられる。

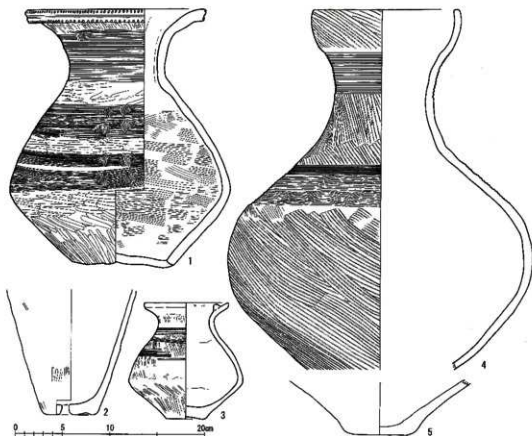
方形周溝墓 12 図化できたのは壺3点、甕2点、鉢1点、小型土器1点の合計7点である。底部を欠く壺(第106図6)は、西溝から出土した。長胴で頸部から短く口縁が開く。口縁部をヨコハケ、胴部をタテハケ、内面はヨコハケを行う。壺の口縁部(第106図4)は東溝から出土した。口縁端面を強いヨコナデし、下端にヘラ刺突列点文を加え、その内面には羽状ヘラ刺突列点文を



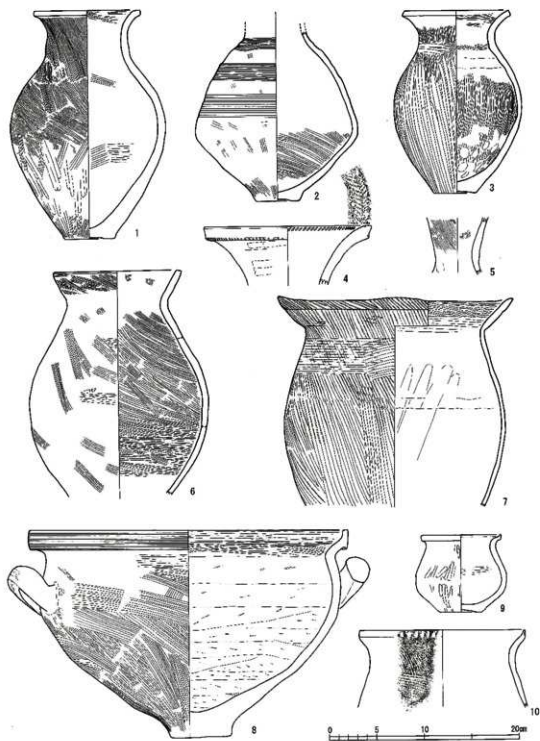
第104図 方形周溝墓出土土器実測図4(縮尺1/4)

施文する。壺の頸部（第106図5）は文様がまったくなく、外面をタテハケ、内面にヨコハケを残すのみである。甕で山形口縁のもの（第106図7）は西溝から出土した。いわゆる近江系の受口状口縁となる直前のもので、ヨコハケで幅広くして口縁帯をつくる。胴部はタテハケののち、同じ工具によるヨコハケ（梯描直線文）、口縁内面はヨコハケののち同じ工具で波状文とする。胴部内面は丁寧なタテナデである。もう1点の甕（第106図10）も西溝からの出土である。口縁端部を摘み上げて、下端にヘラ刻みIIを加える。外面をタテハケののち一部にヨコハケを行う。小型土器としたもの（第106図9）は無頸壺と呼べるものであろうか。ただし小さく開いた口縁の端部を摘み上げてやや面をつくる。胴部外面をタテミガキ、内面にヨコハケを残す。鉢（第106図8）は大型の有段口縁のもので、口縁帯に擬門線文を施文し、胴部外面をヨコハケからタテハケ、内面を横方向にケズリとする。胴部最大径の位置に半円環状の把手を横位に付ける。後期の土器である。周溝墓の時期は多数出土している土器が中期にその時期を求めることができるので、この土器は隣接する竪穴住居1からの混入品と考えられる。

竪穴住居からの混入品と考えた大型の鉢を除く、中期の土器の時期は中期中葉と考えられる。



第105図 方形周溝墓出土土器実測図5（縮尺1/4）



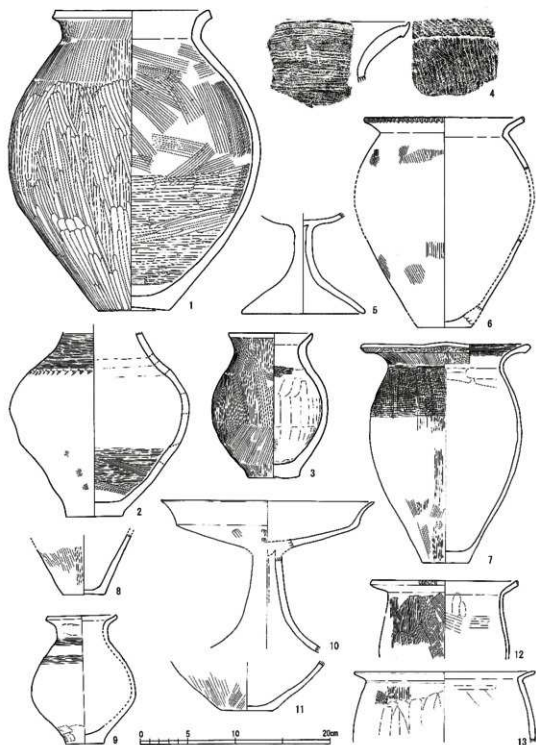
第106圖 方形埴清墓出土土器実測図6(縮尺1/4)

方形周溝墓 13 図化できた土器は壺3点である。南溝から出土した壺(第107図1)はほぼ完形に復元できた。卵形の胴部からゆるく外反する頸部に短い口縁部が開く。口縁部から頸部をタテハケののち胴部全面をタテミガキ、内面も上半をヨコからタテハケ、下半をヨコミガキとする。西溝から出土した壺(第107図2)は頸部から上の口縁部を欠く。胴部上半に櫛描直線文、その下に扇形文を巡らせる。下半に僅かにタテハケを残す。内面は頸部に輪積み痕を残し、下半をヨコハケとする。もう1点の壺(第107図3)はほぼ全形がわかるように残っている。口縁端部のみヨコナデ、胴部全体をタテハケとする。内面の頸部にヨコハケを一部残し、全体をタテナデとする。小型と中型の無文の壺2点が中期後葉、頸部に文様のある小型の壺は中期前葉から中葉の時期と考えられる。後者は周辺からの転落品と考えらる。

方形周溝墓 14 図化できた土器は壺2点、甕6点、高坏2点の合計10点である。ほぼ完形の壺(第107図9)は東溝から出土した。小さく開く口縁端部を僅かに上へ摘み上げる。頸部に櫛描直線文を2段施文する。底部外面のみヨコナデとする。壺の底部としたもの(第107図11)は西溝から出土した。外面をタテハケとする。北溝から出土し、ほぼ完形に復元できた甕(第107図6)は推定であるが、最大径が胴部上半に位置し、頸部は「く」に屈曲し、口縁端面にヘラ刻み目を行う。外面をタテハケとする。もう1点完形に復元された甕(第107図7)は東溝から出土した。前者ほどではないが、胴部の最大径は上半に位置する。口縁端部をヨコハケで幅広の口縁帯とし、一部を指押圧して小さな山形とする。胴部外面をタテハケののち最大径より上をヨコハケとする。同じく東溝から出土した甕(第107図12)は口縁部から胴部上半のみである。口縁端部の一部にヘラ刻み目を加え、胴部の外面をタテハケ、内面をヨコハケとする。もう1点の口縁部から胴部の甕(第107図13)は埋葬施設から出土した。「く」の字に屈曲した口縁部は水平近くに短く開き、ヨコナデとする。胴部外面はタテハケののちタテナデとし、内面はタテナデのみとする。口縁部のみの破片の甕(第107図4)は、口縁端部をナメハケで幅広の口縁帯とする。外面はタテハケ、内面はヨコハケののち波状文とする。甕の底部のみのもの(第107図8)は、外面に僅かにタテハケを残すのみである。東溝から出土した高坏(第107図5)は坏部の多くを欠く。細い棒状の筒部から「ハ」の字状に把が大きく開く。北溝から出土した高坏(第107図10)は脚端部を欠き、坏部と脚部の接合部分も推定である。坏部は口縁が外反し、一部にタテミガキが残る。高坏は2点とも後期まで降ると考えられ、主体部から出土している甕(第107図13)や器形のうかがえるその他の土器は中期の範疇である。よって方形周溝墓の時期は中期後葉で、後期まであった溝に高坏が入り込んだものと考えられる。

方形周溝墓 15 図化できた土器は壺1点のみである。壺(第108図4)は頸部から上の口縁部を欠く。胴部外面をタテハケとする。この壺の時期は中期中葉から後葉のいずれかの時期である。

方形周溝墓 16 図化できた土器は壺3点である。北溝からは完形に復元できたものが2点ある。いわゆる沈線文系の壺(第108図3)は太い頸部から大きく外反した口縁が大きく開く。口縁端面に指押圧ののち、4ヶ所にヘラ刻み目を加える。頸部に櫛描直線文、胴部の櫛描直線文は連弧



第107圖 方形周溝墓出土土器実測圖7(縮尺1/4)

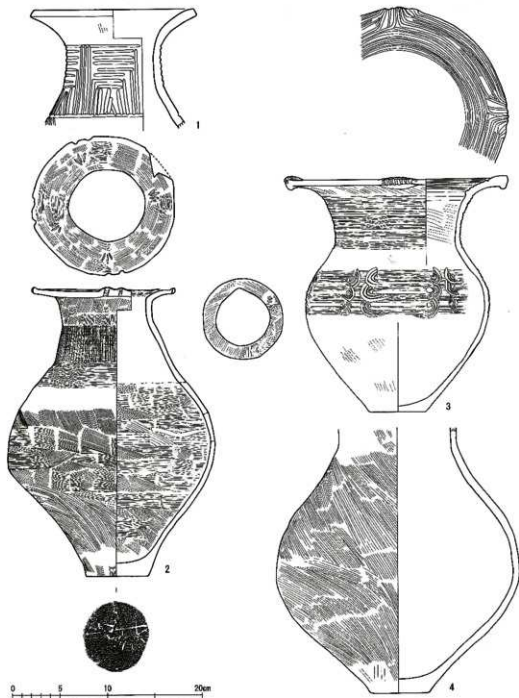
とした櫛描で縦に区切り、擬流水文とする。口縁内面はヘラ沈線の一部を押圧に向けて結束させる。もう1点の壺(第108図2)は太い頸部が長く伸びて口縁が短く外反し、端部に櫛刺突を2個1対で4ヶ所に加える。頸部から胴部上半までタテハケののち廉状文、中をヨコハケ、さらに下半はタテハケとする。口縁内面はヨコハケののち、端部の櫛刺突に合わせて3本の櫛刺突で小の字状とする。口縁部から頸部の壺(第108図1)は東溝から出土した。頸部に沈線の範重文を巡らせる。完形に復元できた2点の壺の時期は中期前葉まで通ると考えられる。

方形周溝墓 17 図化できた土器は壺4点、甕4点、鉢1点の合計10点である。口縁部から頸部の壺(第109図3)は東溝から出土した。袋状口縁で、その口縁への立上りに連続指押圧を加え、口縁帯は斜めにハケ条痕ののち同じ工具で縦に区画する。頸部は横のハケ条痕とする。口縁部だけのもの(第110図5)は北溝からの出土で、口縁端部の内外面両面にヘラ刺突を加える。外面をタテハケ、内面をヨコハケとする。頸部より上の口縁部を欠く壺で、無文のもの(第109図6)は外面のタテハケのみ残る。東溝からの出土である。もう1点の壺(第110図3)も東溝からの出土である。口縁部を欠き、頸部に2段の櫛描直線文の側に櫛描波状文を施文する。甕は3点が東溝からの出土である。3点とも全形を何えるまで復元でき、胴部の最大径が上半に位置する。口縁部に刻み目がない甕(第109図4)は、タテハケののち頸部に櫛描直線文と櫛描波状文を施文する。口縁端部の上下両端に刻み目を加える甕(第109図1)は、タテハケののち胴部上半のみヨコハケとする。内面は全体にヨコハケとする。口縁の端部にヘラ刺突を加える壺(第109図2)は、タテハケののち頸部に櫛描直線文を施文し、内面は口縁部にヨコハケを残す。口縁部から胴部上半までの甕(第109図5)は、頸部の屈曲が弱く、口縁部の開きも小さい。胴部外面をタテハケ、内面をヨコハケとする。東溝から出土した鉢(第110図4)は、底部を欠き、小さな脚台が付く可能性もある。胴部最大径が下半に位置し、有段となった口縁帯に1条の沈線を巡らす。胴部外面にヨコミガキ、内面の下半にヨコハケを残す。甕などの特徴から、その多くは中期中葉の時期をしめすものと考えられる。

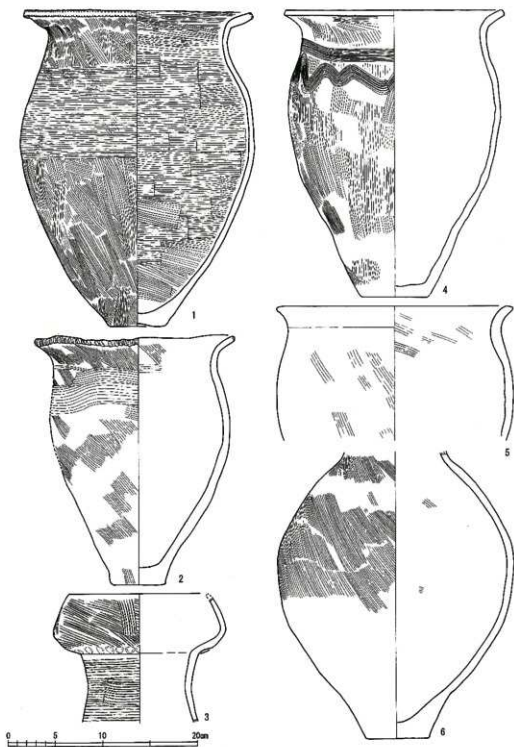
方形周溝墓 18 図化できた土器は甕2点である。いずれも西溝から出土した。完形に復元できた甕(第110図2)は、口縁端面をヨコハケののち、上面へのみヘラ刻み目を加え、一部を指押圧で小さな山形とする。胴部外面をタテハケののち中ほどをヨコハケ、内面の上半をヨコハケとする。底部を欠く甕(第110図1)も口縁端部をヨコハケで幅広い口縁帯とし、一部を指押圧して小さな山形とする。内面には波状文を巡らす。胴部外面はタテハケ、内面はヨコナデとする。この2点の甕とも近江系として典型なものである。

方形周溝墓 19 図化できた土器は壺3点である。底部の一部を欠くのみで、ほぼ全形がうかがえるまで復元できた壺(第110図7)は北溝からの出土である。最大径がほぼ胴部中央に位置し、頸部から外反する口縁の端面を強いヨコナデで窪ませ、その下端にヘラ刻み目を加える。胴部外面を全面タテハケののち、頸部に櫛描直線文を施文するが、その一部を折り返して擬流水文とする。内面は全面ヨコハケののち、一部をヨコナデとする。全体に厚手の器壁である。口縁部から頸部の壺

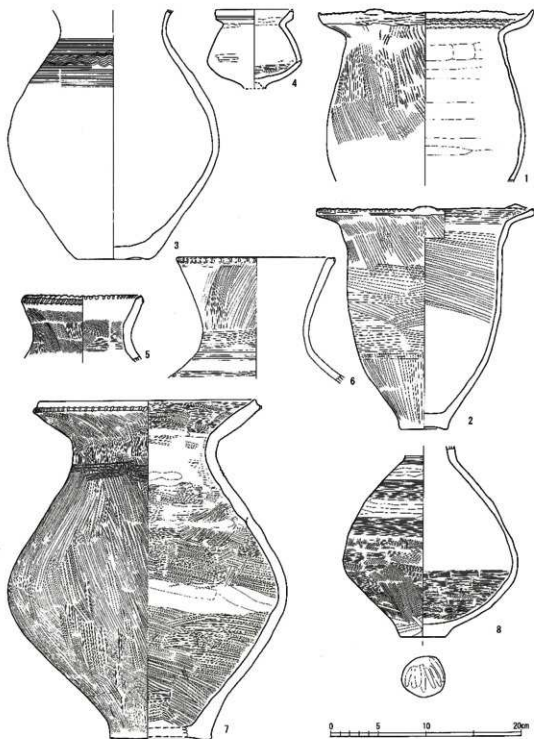
(第110図6)は西溝からの出土である。口縁端面を窪ませ、外側にヘラ刻み目を加える。タテハケののち、頸部に櫛描直線文を施文する。大型の直口壺に分類され、摂津などの淀川水系に多い



第108図 方形周溝墓出土上器実測図8(縮尺1/4)



第109圖 方形周溝墓出土土器実測図9 (縮尺1/4)



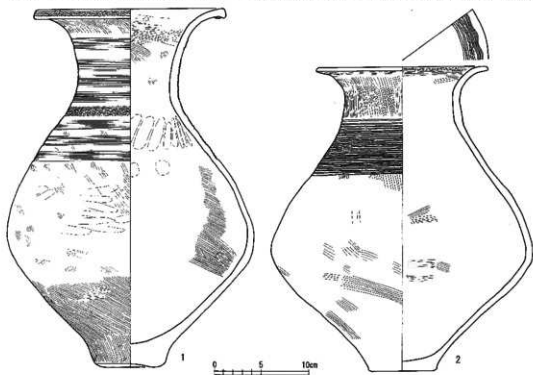
第110圖 方形周溝墓出土土器実測図10(縮尺1/4)

器種である。頸部から上の口縁部を欠く壺（第110図8）は胴部上半に櫛描直線文を2帯で3段巡らせ、その間をヨコミガキとする。胴部中央をヨコハケ、下半はタテハケとし、内面は下半をヨコハケとする。底部も丁寧に磨く。

方形周溝墓 20 図化できた土器は壺棺として出土し、ほぼ完形に復元できた壺1点である。壺（第111図1）の長い頸部から伸びた口縁が水平近くまで開く。口縁端面に櫛描波状文を、その長い頸部に櫛描直線文を4段と3段を施文し、その間には櫛描波状文を加える。胴部下半はタテハケののち中央にユビナデを一部加える。内面はナナメ、もしくはヨコハケで、頸部にユビオサエを残す。西溝から口縁部に石で蓋をしたように出土し、壺棺と考えられている。

方形周溝墓 22 図化できた土器はほぼ完形に復元できた壺1点である。壺（第111図2）は、やや膨らむように張る胴部に太い頸部から伸びた口縁が水平近くまで開く。太い頸部に櫛描直線文を数段重ね、口縁内面には櫛描波状文と櫛描直線文を巡らせる。

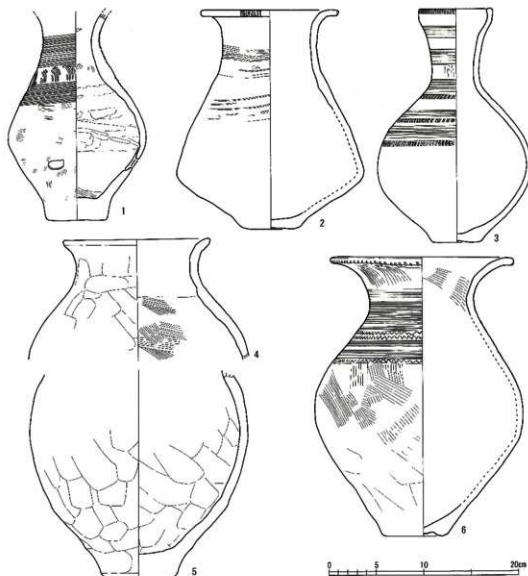
方形周溝墓 23 図化できた土器は壺3点である。西溝から出土した完形の壺（第112図2）は太い頸部から外反した口縁部が水平近くまで開く。頸部が太く、櫛描直線文と櫛描波状文を施文する。胴部最大径が下半に位置し、底部も大きく、非常に安定した印象を与える。残る2点は北溝から出土した。細頸壺（第112図3）は丸い胴部から長く伸びた頸部に、内湾した口縁の断面を丸くする。頸部は櫛描直線文が3段ののち下に、櫛刺突列点文を麻状文のように施文する。胴



第111図 方形周溝墓出土土器実測図11（縮尺1/4）

部上半にも同じように櫛描直線文と櫛刺突列点文を施文する。明確な接点が不明であったので、口縁部と胴部に別けて図化した壺（第112図4・5）は、頸部からの外反が弱く、口縁部の開きが小さい。胴部外面はタテナデ、内面の上半はヨコハケ、下半はタテナデとする。文様のある壺の時期は中期中葉と考えられる。

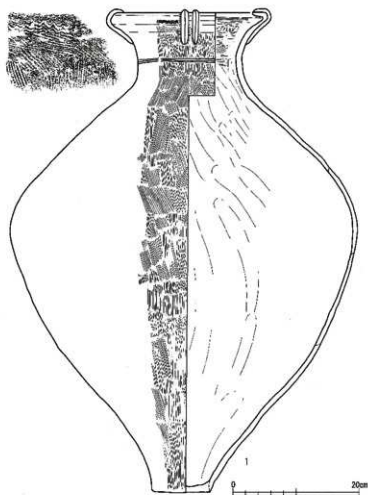
方形周溝墓24 完形の壺（第112図6）は東溝から出土した。太い頸部から外反した口縁が水平近くまで開く。胴部外面をタテナデののち、頸部に櫛描直線文を数段重ねて、櫛描山形文を2段、さらに櫛描直線文ののち、最下段となる胴部上半にも櫛描山形文を施文する。内面は口縁部にヨコ



第112図 方形周溝墓出土土器実測図12(縮尺1/4)

ハケを残す。口縁部を欠く壺（第112図1）は、胴部下半に焼成後の穿孔がある。頸部と胴部上半に櫛描直線文を数段施文し、その間には扇形文を連続して巡らす。この壺も中期中葉であろう。

壺棺 大型の壺棺（第113図）が1点復元できている。方形周溝墓10の東溝底に横たわるように破砕された状態で出土している。器高が70cmを超える大型の袋状口縁壺である。袋状口縁の端部を大きく内側へ折り曲げる。胴部最大径はほぼ中央に位置し、底部がすばまるように小さくなる。袋状口縁に櫛描波状文（3本）を施文したのちに、2本1対の棒状浮文を4方向に貼り付ける。胴部全面にタテハケののち、頸部に櫛描直線文（3本）を施文する。口縁内面はヨコハケ、胴部内面は縦にユビナデとする。口縁形状から、条痕文系の壺が北陸で大きく変容したなかでも、最後の形態のものと考えられる。このような変容した条痕文系の大型の壺棺は加賀を中心とする北陸では類例があるが、敦賀より西の若狭湾沿岸部ではみられない。



第113図 方形周溝墓出土壺棺実測図（縮尺1/6）

(5) 方形周溝墓の溝出土の土器

方形周溝墓の溝からは供獻土器として先に述べた土器以外にも破片で、あとから溝へ混入したと考えられるものも多い。しかしそのような土器にも特徴的な文様がある。ここではそのような土器について取り上げた。特に文様に注目して抽出したため、壺の口縁部または胴部上半が多くなった。以下、墓の時期を直接に示すものではないと考えられるが、各方形周溝墓の溝ごとに特徴的な土器について説明していきたい。そのほか直接触れることのなかった土器については観察表を参照されたい。

方形周溝墓1の溝から出土した土器で、図化したのは2点である。I口縁内面に刺突列点文を施文して瘤状突起を貼り付ける壺(第114図1)と、袋状口縁の外面に羽状刺突列点文を施文し、円形浮文を貼り付ける壺(第114図3)である。

方形周溝墓2の溝から出土した土器で、図化したのは2点である。ヘラ刺突列点文を施文した壺頸部片(第114図6)と、I口縁端部にヘラで山形文を施文した壺口縁(第114図10)である。

方形周溝墓3の溝から出土した土器で、図化したのは、やや扁平む頸部に羽状ヘラ刺突を施文した壺(第114図8)の1点である。

方形周溝墓4の溝から出土した土器で、図化したのは、立上がった口縁部に刺突を加える壺(第114図11)の1点である。

方形周溝墓5の溝から出土した土器で、図化したのは、頸部に焼成前の円孔をあける無頸壺(第114図12)の1点である。

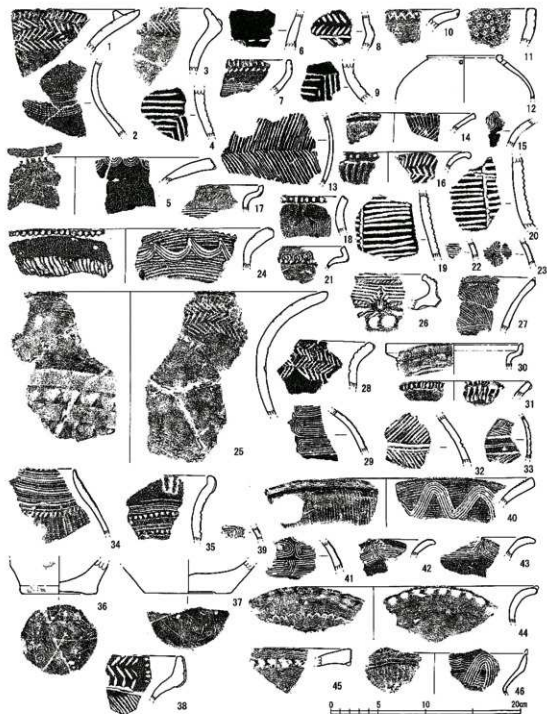
方形周溝墓6の溝から出土した土器で、図化したのは4点である。いずれも壺で、口縁部に羽状刺突列点文を加え、櫛描直線文を施文するもの(第114図7)、頸部に櫛描直線文と櫛刺突列点文を施文するもの(第114図2)、胴部上半に沈線の箱重文を施文するもの(第114図4・9)である。

方形周溝墓7の溝から出土した土器で、図化したのは2点である。広口壺(第114図5)は口縁端面に櫛描波状文を施文し、下端にヘラ刺突を加え、内面の端部に半円の扇形文を連続して施文する。またI口縁内面に羽状櫛刺突列点文を施文するもの(第114図14)も壺の口縁である。

方形周溝墓8の溝から出土した土器で、図化したのは、沈線文系土器のI口縁部の一部の破片とおもわれるもの(第114図15)と、その胴部片(第114図22・23)2点の合計3点である。

方形周溝墓9の溝から出土した土器で、図化したのは壺頸部2点と埋葬施設から出土した壺のI口縁部の3点である。壺の頸部片は縦の沈線に横の沈線を重ねて充填するものであるが、似たような胎土・色調で同一個体の可能性がある。縦の沈線を先に行うもの(第114図19)と、その逆の部分のもの(第114図20)で、同一個体とすると、縦の沈線を先行、または横の沈線を先行する施文ではなく、左から縦と横の沈線を交互に施文したものと考えられる。壺の口縁(第114図16)は端面にヘラ刺突を加え、その下に縦の沈線を巡らし、内面を羽状刺突列点文とする。

方形周溝墓12の溝から出土した土器で、図化したのは、壺口縁部3点と胴部片1点、壺の口縁



第114図 方形周溝墓出土土器実測図13(縮尺1/4)

部1点の合計5点である。壺の口縁部は内面に羽状刺突列点文を施文するもの(第114図25・28)で、頸部までであるもの(第114図25)には、微かに櫛描直線文が残されている。もうひとつのもの(第114図18)は、口縁端部にヘラ刺突を加え、タテハケとするもので、短頸壺と考えられる。壺の胴部片(第114図29)は、沈線で楕円の箱重文を縦に並べる、沈線文系の壺である。甕(第114図17)は受口状口縁で、立上りに刺突列点文、頸部に櫛描直線文を施文する。甕の口縁部(第114図24)は、器壁から大型の甕と判断したが、甕の施文などとはやや異なり、壺の口縁となるものかもしれない。口縁端部にヘラ刺突を加え、太いタテハケとし、内面にはヨコハケののち連弧状に波状文を施文する。

方形周溝墓14の溝から出土した土器で図化したのは、壺頸口縁部4点と胴部片1点、甕の口縁部の合計6点である。壺の口縁部は条痕系の袋状口縁(第114図26)、口縁端部にヘラ刺突を加えて、内面にも刺突列点文を施文するもの(第114図31)、僅かに立ち上げた口縁端面に波状文を施文し、タテハケののち頸部に櫛描直線文を施文するもの(第114図27)、そして口縁に竹管文を施文した受口状口縁の頸部が強く締まり、甕ではなく壺と判断したもの(第114図21)である。壺の胴部片(第114図32)は横の沈線をはさんで羽状刺突列点文とする。甕(第114図30)は刺突列点文を加えた受口状口縁である。

方形周溝墓15の溝から出土した土器で図化したのは、壺の口縁部1点と胴部片1点、甕の口縁部1点の合計3点である。壺の口縁部は大きく開かないもの(第114図35)で、その端部に2本の棒状浮文を貼付けて、頸部に櫛描直線文と刺突列点文を交互に施文する。胴部片(第114図32)は沈線で区画した一部に羽状に刺突を加えるものである。甕の口縁部(第114図40)は口縁端部をヨコナデとする珍しいもので、以下をタテハケ、内面はヨコハケののち、振幅の大きい櫛描波状文を施文する。

方形周溝墓16の溝から出土した土器で図化したのは、壺の口縁部1点と壺の底部1点の合計2点である。壺は無頸壺(第114図34)と考えられ、口縁端部にヘラ刺突を加え、肩部の刺突列点文の間を数段の櫛描直線文で埋める。底部(第114図37)には木葉痕がある。

方形周溝墓17の溝から出土した土器で図化したのは、いずれも沈線文系土器の口縁部2点(第114図42・43)と胴部片2点(第114図39・41)、羽状条痕文の胴部片(第114図13)1点の合計5点である。

方形周溝墓18の溝から出土した土器で図化したのは壺?の口縁部1点と、甕の底部1点の合計2点である。壺(第114図44)としたが、口縁端部を指押圧でさざなみ状とする甕の可能性もある。内外面ともに波状文を施文する。底部(第114図36)には木葉痕がある。

方形周溝墓21の溝から出土した土器で図化したのは、口縁端面に小刻みな波状文を施文し、下端に刺突を加える広口壺の口縁部(第114図45)の1点である。

方形周溝墓24の溝から出土した土器で図化したのは、一部を山形口縁とするもの(第114図46)で、口縁外面はヨコハケののちタテハケ、内面は波状文ののち、U字状の櫛描文で切る。

このほかに方形周溝墓でもどの溝から出土したかが特定できなかったものに、立上がった口縁帯に羽状刺突列点文を施文するもの（第114図38）がある。

以上、方形周溝墓の溝へ混入した破片46点を図示したが、この中で明らかに後期の土器と考えられるものは、受口状口縁壺3点である。つまり溝へ混入した破片の多くが中期の土器に限定されることから、方形周溝墓の溝の多くは後期にはほとんど埋没していた可能性が高い。

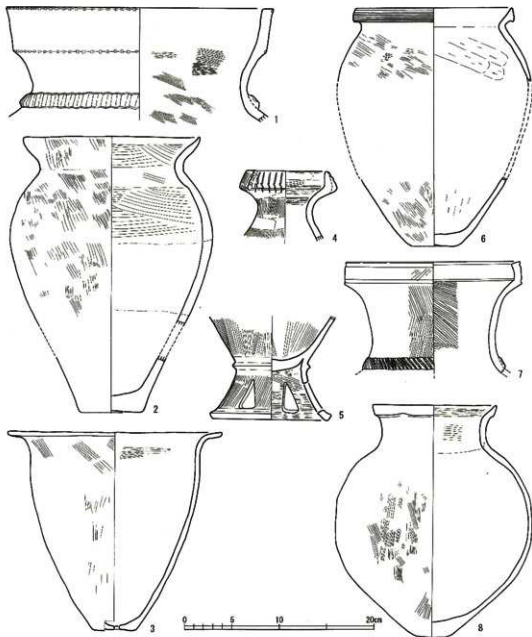
（6）包含層出土の土器

方形周溝墓の溝の土器と同じように特徴的な文様のある土器について抽出したため、壺の口縁部または胴部上半が多くなった。特徴的な土器について説明するが、そのほか直接触れることのなかった土器については観察表を参照されたい。

いくつか完形に復元できたもの、または器形が何えるまでに復元できたものがいくつかある。壺は、3点ある。口縁部が水平に開くもの（第115図3）は、いわゆる「ハケ甕」と呼ばれるもので、外面をタテハケ、内面をヨコハケとするが、摩滅のため残りが悪い。口縁端部を僅かに摘み上げるもの（第115図2）は、胴部の最大径が上半に位置するもので、外面をタテハケ、内面をヨコハケとする。胴部が大きく張らないで口縁となる「ハケ甕」で、中期後葉のものであろう。胴部を大きく欠くもの（第115図6）は、推定ながら器形は復元できた。頸部が「く」の字に屈曲して短い口縁部となる。底部は大きく安定した器形に復元される。丹後から若狭湾の後期に典型的な有段口縁壺である。壺で、ほぼ全形が復元できたもの（第115図8）は、丸い胴部から伸びた頸部に小さく開いた口縁部を幅広として有段口縁とする。胴部外面をタテハケ、口縁部内面をヨコハケとする。後期であろう。口縁部から頸部までの壺が3点ある。口縁が袋状となるもの（第115図4）は頸部までしかないが、細頸壺となるであろう。口縁帯に刺突列点文を加え、棒状浮文を貼付ける。頸部外面をタテハケ、口縁部内面をヨコハケとする。残る2点は近江などにも多い、凹線文系の壺として典型的なものである。頸部に貼り付けた凸帯連続指押圧を行うもの（第115図1）は、口縁帯の上下両端にヘラ刺突を加える。同じく頸部に貼り付けた凸帯に櫛刺突列点文を加えるもの（第115図7）は、口縁帯の上下両端それぞれに1条の凹線を施文する。また、なんらかの脚台と思われるもの（第115図5）は、播磨など瀬戸内の中期後葉に特徴的なもので、播磨では無頸壺に、吉備周辺では壺や鉢などにつく。脚部と胴部の間に断面三角形の凸帯を付け、脚部に山形の透かしをあけるものである。外面をタテハケ、胴部内面をタテハケ、脚部内面をヨコハケとする。

破片では、特徴的な文様のものを中心に抽出したため、壺の口縁部と胴部片が多い。抽出した破片を概観しても、弥生時代前期にまで遡る遠賀川式土器のものは見当たらなかった。最も古い様相を示すのが、胴部上半にヘラ描直線文に三角刺突列点文を加えるもの（第116図1・2・3）である。また、口縁の内面にヘラ刺突列点文を何段にも重ねるもの（第116図5）は、刺突列を短い沈線で縦に区切るのも、中期でも比較的古い時期に多くあり、三角刺突列点文の文様ととも

に日本海側の山陰地方周辺にその系譜が求められるのではないであろうか。壺の口縁部内面に、山形に沈線を巡らせるもの（第116図12）は多くはないが、羽状刺突列点文を施文するもの（第116図8・16）は非常に多く、目立つ文様である。口縁端部へ刺突を加えるものは多数あるが、上端のみのもの（第116図13）は意外と少ない。また端面に山形文を施文するもの（第116図14）



第115図 包含層出土器実測図1 (縮尺1/4)

も多くはない。袋状口縁の外面に羽状刺突を施文するもの(第116図19)は北陸地方に類例が多い。胴部上半の文様としては櫛描直線文と櫛描波状文に刺突列点文の組み合わせが多いが、波状文が乱れていたり、櫛原体の線が不揃いで稚拙な文様のもの(第116図15)が多いのは、甕内の櫛描文とは明らかに違うものである。頸部に貼り付けた凸帯を縦に棒状浮文でつなぐもの(第116図28・31)は周辺では本遺跡のみで目立つようである。指押圧を加えた凸帯(第116図34)、または櫛刺突を加えた凸帯(第116図32)は、凹線文系甕(第116図20)に特徴である。広口甕の口縁部を垂下させ、波状文などを巡らせ円形浮文を貼り付ける装飾が著しいもの(第116図21・22)

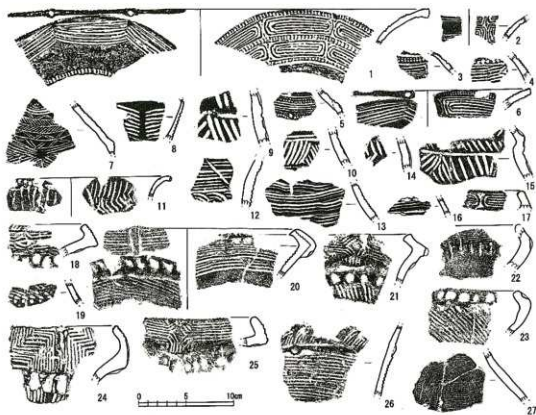


第116図 包含層出土土器実測図2(縮尺1/4)

はほとんど確認できなかった。また扇形文についてもいくつかはあるが、施文する位置や、扇形文の施文が稚拙なもの（第116図33）が目立つ。逆に北陸的な文様である斜行短線文（第116図18）はほとんど確認することはできなかった。

甕については口縁端部に刻み目を加え、外面をタテハケ、内面をヨコハケののち波状文とする「ハケ甕」が多く（第116図10・11）、さらに刺突列点文まで加えるもの（第116図7）まであって装飾されるものが多い。甕と同じ施文であり、甕となる可能性の口縁部（第116図4）もある。ハケ甕の口縁をヨコハケにして、次第に立ち上げるもの（第116図6・9）は非常に多く、甕のみで比較しても本遺跡に近江系土器が多いのは、単に近接するだけではなく、近江系土器の波及力の強さを物語ると考えられる。ハケ甕の頸部が「く」の字に屈曲するもの（第116図17）になると中期でも新しくなり、近江系の施文にも後期につながる直線文と波状文に刺突列点文が組み合わせとなるもの（第116図23・24・26）が多くなる。畿内では中期でも後半には安定した器種となる高坏は非常に少ない。脚台のみ（第116図27）であるが、このよう脚に塊状の坏部が付くタイプが高坏に対応するものであろうか。

ほかに甕と考えられる破片（第116図25）もあるが、点数が少なく不明である。底部には木葉



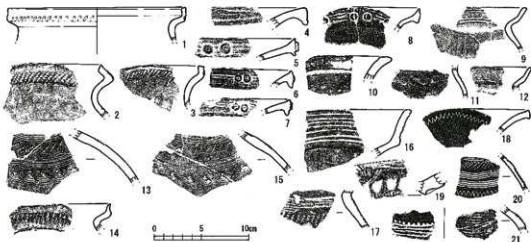
第117図 包含層出土土器実測図3（縮尺1/4）

痕が残る例（第116図29・30）は多く見られるようである。

本遺跡の土器で最も特徴的なのは、条痕文系土器に加えて、沈線文系土器が非常に多く出土していることである。口縁端部の円形刺突を単位の区切りとして、外面に弧状の沈線を7から8本重ね、頸部の刺突列点文の間を無文帯とし、内面の、刺突列点文の間を沈線の櫛目文で充填するもの（第117図1）は、本遺跡で確認された沈線文系壺でも最も大きな破片である。そのほかの破片も、文様のパターンは若干異なるが、これに類似するもの（第117図2・5）が多く、その胴部片（第117図3・4・10）も同様である。沈線の櫛目文でありながら、立上がる口縁帯と考えられるもの（第117図17）は、小片で詳細は不明である。また沈線文系鉢と考えられるもの（第117図8）は、縦羽状に沈線を重ねる。沈線文系土器の影響を受けたと考えられる壺（第117図7）は、瘤状突起に近い浮文に菱形文を収束させ、沈線間を羽状や山形文で充填する。また、頸部の沈線を羽状（第117図14・15）や、山形文（第117図10）で区画するものも出土が多い。

条痕文系土器には、胎土や色調、さらに文様からも、明らかに東海地方からの搬入品と考えられる口縁部（第117図20）や、頸部片（第117図26）があるが、その多くは、在地で変容したもの（第117図18・21・24・25）が占める。また、さらに大きく変容したもの（第117図22・23）は、口縁立上がり原曲も丸くなる。ごく一部の破片のため全体は不明であるが、太い櫛描直線文を地文とするように重ねるもの（第117図13・16）や、刺突列点文をめぐるもの（第117図19）もある。只田町式のそれに近いような、細い櫛描直線文を重ねて縦に区画する破片（第117図27）は意外と少ない。沈線文系でも、壺（第117図11）と考えられるものは少ないが、条痕文系土器の壺と考えられるもの（第117図12）も非常に少なく、今回図化したのはこの破片も含めて2点である。

後期の壺の口縁には、やはり近江系の受口状縁のもの（第118図3）があるが、抽出した特徴的なものは擬門線文のみのもの（第118図4）だけではなく、円形浮文を貼り付けるもの（第



第118図 包含層出土土器実測図4（縮尺1/4）

118 図5・6・7)や、円形竹管文を加えるもの(第118 図8)など、日本海側に固有なものである。なお、擬凹線文のみが施文される壺の口縁(第118 図4)は、このほかの土器の胎土とは異なり、茶褐色(いわゆるチョコレート色)の色調で、角閃石は顕著ではないが、生駒山麓の土器である可能性がある。後期の壺の口縁部内面に文様があるのは、山形文を施文するもの(第118 図18)などで、数は少ない。胴部片には、櫛描直線文の間に刺突列点文と扇形文を施文するもの(第118 図13・15)や、櫛描直線文の下に山形文を施文するもの(第118 図20)、さらに櫛描直線文の下に刺突列点文を加えるもの(第118 図17)および刺突列点文の下に沈線を重ねるもの(第118 図21)があり、これらは中期かもしれない。

壺については、日本海側に特徴的な擬凹線文が多くあるが、近江系の受口状口縁のもの(第118 図2・14)も多く、受口が大きく内側に屈曲する本来の近江系には見られないもの(第118 図2)もある。ほかには、北陸の後期に特徴的なS字のスタンプを施文するものは見当たらないが、連続して渦巻文のスタンプを施文するものが数点あり、スタンプの施文する位置が口縁帯であったり(第118 図9・12)、胴部上半であったり(第118 図9・11)、北陸に典型的なスタンプ文の状況とは異なる。

このほかの器種に高坏と器台があるが、高坏には内面肥厚するもの(第118 図10)と、器台の口縁帯に擬凹線文を施文するもの(第118 図16)がある。

第2節 遺物各説

第4表 弥生土器観察表

番号	図版 番号	出土遺構	タ リ ン ド	部 位	形状・文様・技法	口徑	底徑	高さ	胎土	色澤	施文	残存 率	備考
73-1	61	生息	1	鉢	外) 脚部にケズリ 内) ハケ	(8.7)	4.8	6.0	①	赤褐色	良好	1/2	付付
73-2	61	生息	1	鉢	外) ナデ 下半部に指轆圧痕 内) ナデ	(6.2)	3.4	6.2	②	淡茶褐色	良好	1/3	指轆底?
73-3	60	生息	1	鉢	外) 上半部に指轆直線文 (7本) 3 本、その下に羽状線刻列点文、 その下に波状の全周文を施す。下 半部はタミミギキ後中央部のみコ コミギキ。 内) ナデ	-	6.0	残24.7	①	淡茶褐色	やや 不良	脚部 ほぼ 完形	
73-4	61	生息	1	高 杯	脚部面直取り。 外) タミミギキ 4ヶ所穿孔 内) 脚部はタナハケ後ココハケ	-	14.4	残12.5	②	赤褐色	良好	脚部 ほぼ 完形	4ヶ所穿孔
73-5	生息	1	床面	高 杯	口縁部が内側に肥厚する。 外) ココミギキ 内) ココミギキ	28.7	-	残3.7	①	灰褐色	普通	1/2	
73-6	60	生息	2	灰 土	外) 口縁をココハケ後ナメハケ で面取りして立ち上げ、胴部に指 轆直線文 (23本) を施す。底はナ メハケ 内) 不明	(24.8)	-	残18.6	②	褐色	良好	1/3	
73-7	60	生息	2	高 杯	外) ハケの 部をナデ面す 内) ハケのちナデ面す	-	(4.3)	残6.7	①	褐色	良好	底部 1/2	
74-1	61	生息	3	鉢	外) 口縁部に指轆突、胴部に指轆 直線文 (7本)、全体はナメハケ 内) ココハケの後端部をナデ。底 部に指轆半周	(16.6)	-	残6.1	②	薄褐色	やや 不良	口縁 部1/3	
74-2	61	生息	3	灰 土	外) 4本の指轆直線文。胴部はナデ 内) ナデ	(25.6)	-	残6.2	②	淡茶褐色	良好	口縁 部1/4	
74-3	61	生息	3	灰 土	外) 7本の指轆直線文。胴部はケズ リ?ミギキ? 内) ナデ	(26.0)	-	残3.4	①	淡灰褐色	良好	口縁 部1/4	
74-4	61	生息	3	灰 土	外) 6本の指轆直線文、底はナデ 内) ハケ後ナデ	(18.8)	-	残3.9	②	赤褐色	良好	口縁 部1/4	
74-5	61	生息	3	灰 土	外) 4本の指轆直線文、胴部にヘリ割 みで施す。底はタナハケ後 ナデ 内) ナデ	(14.5)	-	残5.1	②	淡赤褐色	良好	上半 部1/5	スス付着
74-6	61	生息	3	灰 土	外) 6本の指轆直線文、胴部はナメ ハケ 内) ナデ	(12.6)	-	残7.0	②	淡茶褐色	良好	上半 部1/5	スス付着
74-7	60	生息	3	高 杯	口縁部は外反し丸く収める 外) 口縁部はナデ、杯部はケズリ 後ナデ。脚部はタミミギキで面取 内) 口縁部はココハケ。底は不明	(30.0)	17.2	28.2	②	淡茶褐色	良好	3/4	3ヶ所穿孔
74-8	61	生息	3	-	脚部をナデ面取り 外) タタタ及びナメハケ 内) ナメハケ	-	16.5	残4.3	②	緑褐色	良好	脚部 1/2	
74-9	61	生息	3	-	脚部部をナデ面取り 外) ココハケ 内) ココハケ後ナデ	-	19.3	残8.0	①	淡緑褐色	良好	脚部 3/4	
75-1	60	生息	3	灰 土	口縁は屈曲し上に上がり受け口状 を呈す 外) 口縁部はナデ面取り後指轆 突、胴部に指轆直線文 (現状3本) 内) ナデ	15.6	-	残4.7	①	褐色	良好	口縁 部は ほぼ 完形	
75-2	生息	6	床面	高 杯	外) 口縁部は2本の指轆直線文。胴部 はナメハケ、底部はナデ。 内) ケズリ。口縁部はナデ	15.6	3.7	24.2	②	薄灰褐色	良好	1/3	
75-3	生息	5		灰 土	受け口状口縁 外) 口縁部に指轆突を加え、以下 はナメハケ 内) ココハケ。口縁部はナデ	14.2	-	残4.2	茶褐色	良好			
75-4	60	生息	5	灰 土	外) 口縁部はナデ、全体ではタ ナハケの後 逆「J」状のヘリ割 き記号を施す。 内) ココハケ	13.0	-	残11.7	②	淡赤褐色	良好	口縁 部は ほぼ 完形	